

二十四輩順拜圖會

信濃上野

五

波  
1810  
10-5



八波全  
號 1870  
卷 1-5

金星本

二十四輩順拜圖會卷之五

目錄

○信濃之部

- 戸隠山 願法寺
- 親鸞松
- 長命寺
- 康樂寺
- 正妙寺
- 上野之部
- 善光寺
- 堂照坊
- 西廡寺
- 芝阿彌陀堂
- 長智乃名号
- 長稱寺
- 麻道之麻
- 明專寺
- 本田若光の仲妻
- 本誓言寺
- 武運長久の名号
- 正妙寺
- 八幡乃社



# 戸隠山

戸隠山 遠くは海と見ゆ  
 南面より登るべし  
 大門三王門と云はれ  
 奇石怪岩はるる  
 ららりて松林のま  
 樹をばさむいぢり日の  
 蔭をばさむいぢり日の  
 儂い人なかり皆松とて登るべし  
 蓋へり山の北面は盛夏の時と云  
 飛雪滞く推まし候く登るべしと云  
 けしの水は後始あり阿弥陀がまはら  
 ろ中とて梅の木を繁むせり  
 高祖聖人宮に登山まじりくの陰  
 妙眼方々惜く止り候し三門の  
 弥陀佛と感得みま即ち  
 法く其るを信じて  
 今も尚あとの什物あり



又聖人戸隠山より  
 妙なり月のとし  
 の月りたると御滝下  
 泳ぐ深ん  
 内あり

元かくしり  
 移る小月の  
 うつろふ  
 心のま  
 とまけ  
 とま  
 そん



其二



四回法名



本社

此の山は  
名無しの  
山なり

野尻の湖水

戸張山

夏雄山



明光山

野尻村



○妙高山の麓より西の方には、後醍醐天皇の御隠れ所あり。此の山は、昔は、  
 乃、後醍醐天皇の御隠れ所あり。此の山は、昔は、  
 乃、後醍醐天皇の御隠れ所あり。此の山は、昔は、

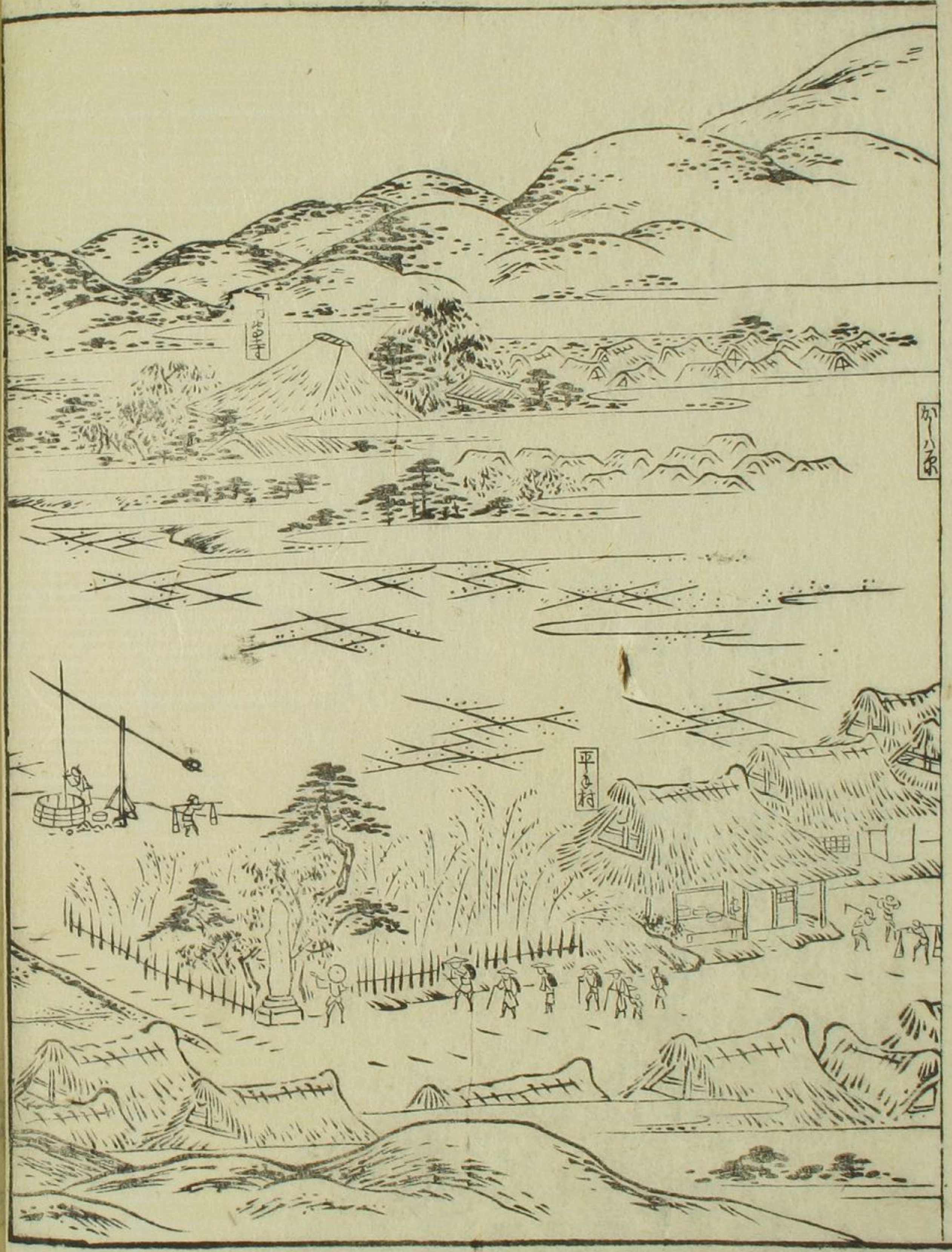
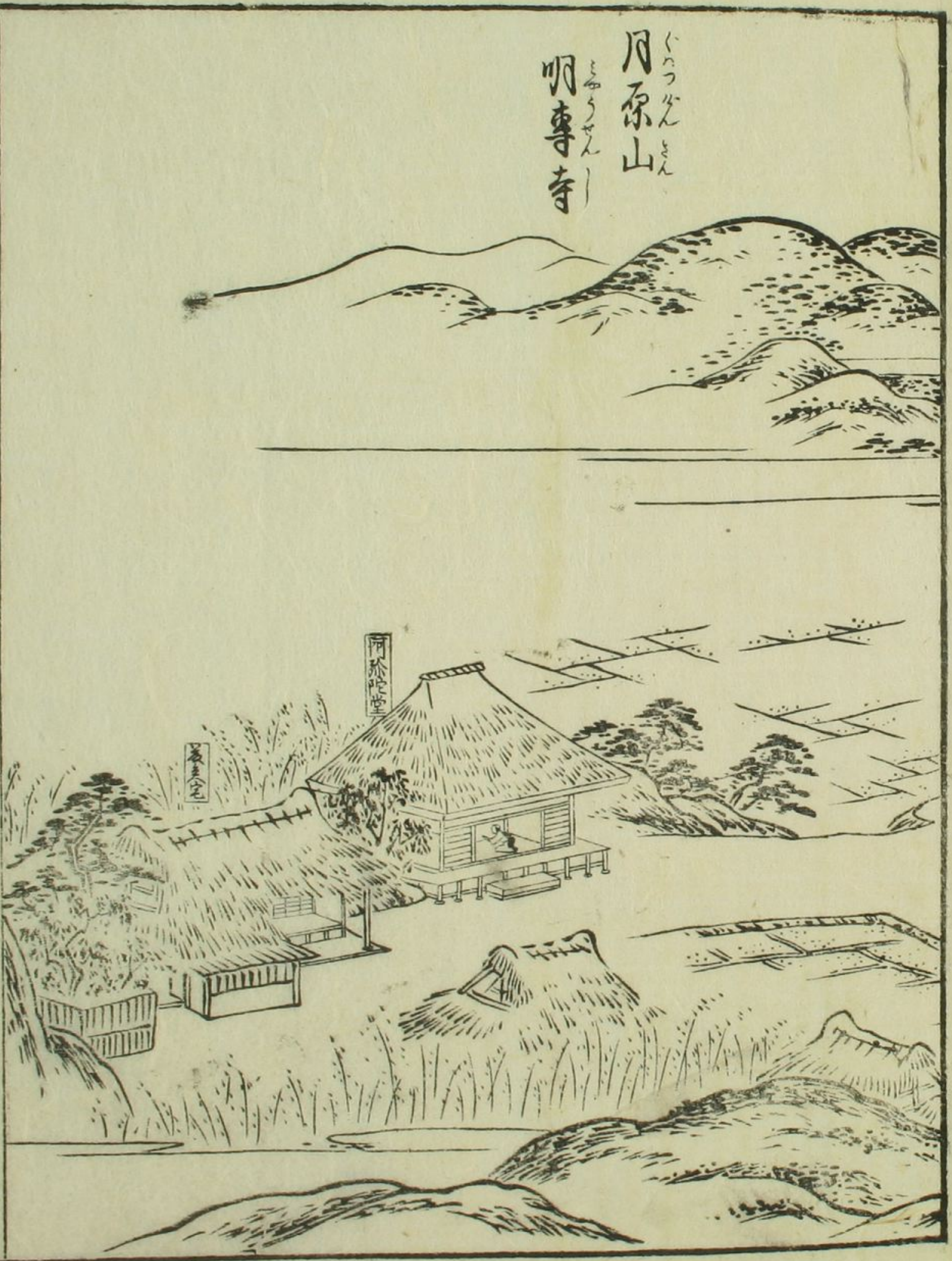
凡原山明専寺 東流 水内郡柏原とあり

本寺阿彌陀如來 市長ケニ天公寺 本堂九間口面○此寺從前三州管領  
 郡凡原とあり。此の山は、昔は、  
 治の時三河國矢野の宿禰寺とあり。高祖聖人關東より河津  
 人より歸依し、佛法隆盛して本宗を改め真宗の佛圖と  
 あり。其後河津より真佛上人とあり。安土より化隆とあり。古  
 たり高祖聖人九字の名号三幅と濞等あり。此二幅と  
 け明専寺と授け給ふ。一幅は、此地の八郎とあり。一幅は、播州  
 魚橋安樂寺と授け給ふ。○此寺の其後真宗念  
 佛の道場として代々お供し、うらふ天正年中、織田

明高山



くわつざん  
月原山  
とらうぜん  
明専寺





信長云石山の御本坊を煮て合戦及び龍如上人又坂御  
籠城あり時三州又真宗の門徒教多あり其國司は信  
長云一対し憚り給ふの旨何門て宗門所停廢の事あり  
志うれし志乃深切あり者ハ國司の命と違背して改宗  
せざらんよめり了西禅門と首と刻らざぬ其附明香  
寺とかの又郎妻ハ國中退去仰後區成國又之獄へ  
始ハ善光寺村又岡垣一のら又尚不又移住し寺は相  
續とつくり○靈宝九字名号十字名号  
聖人ハ之  
御真寺六字名号  
蓮如上人  
其外教品これと略し  
枕石山願法寺 水内郡新井村より

本寺の阿彌陀如來 善光寺の如來  
聖徳太子御感得之 ○祖師聖人枕石所本寺  
御  
信上人の御住かり 其外靈宝略之

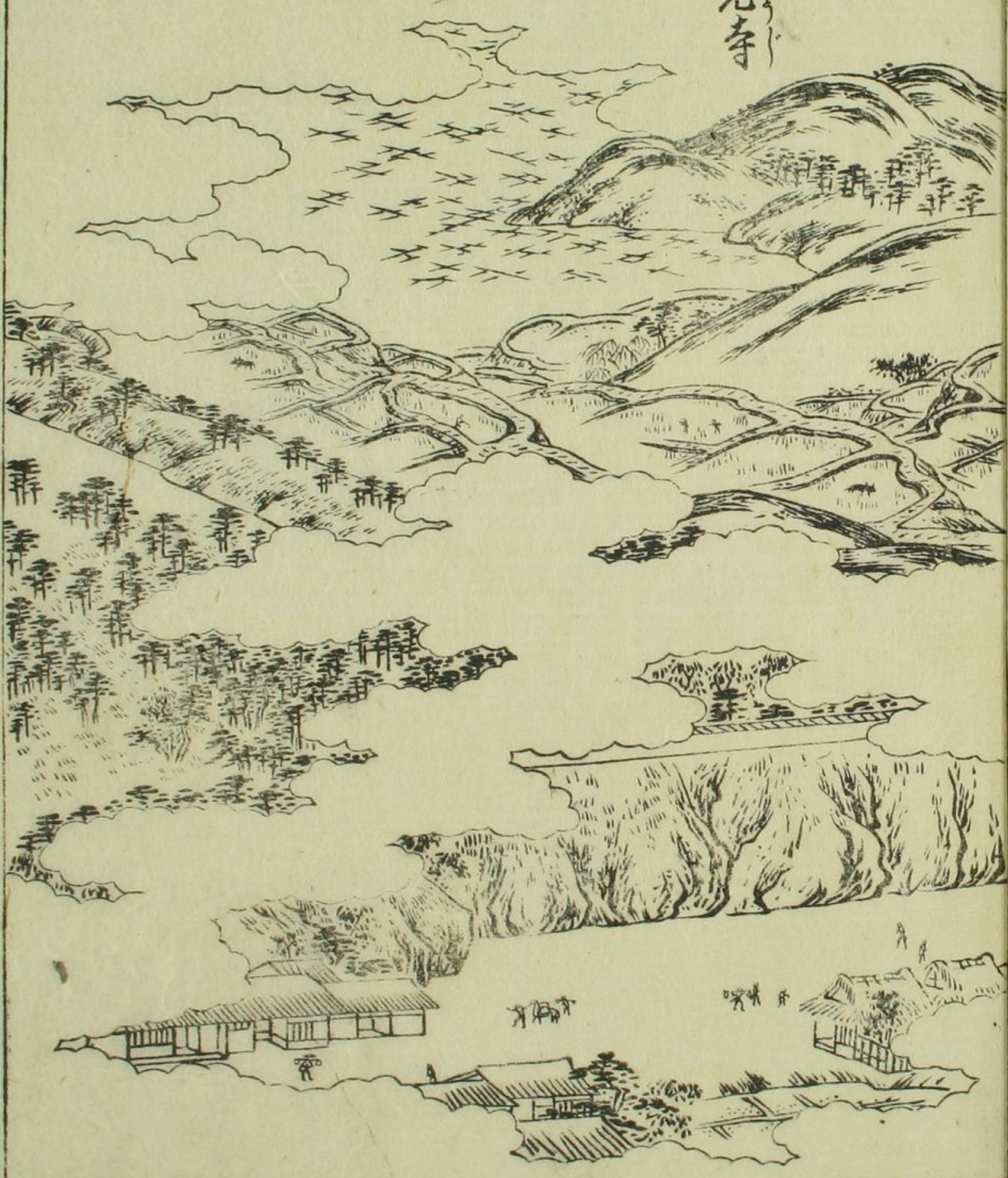
○柏原より一里余新井村より二里又後を勝と云  
在家あり是三州の僧人又郎妻が末孫ありて專明寺とい  
時又信州又立城尚不ハ住ハ聖人御真宗九字名号と傳  
素して安んじたり

○山邊り又若田と云る不ハ覺如上人乃所并子善教坊乃四條より  
善教寺と云る寺なり

善光寺 五穀宗

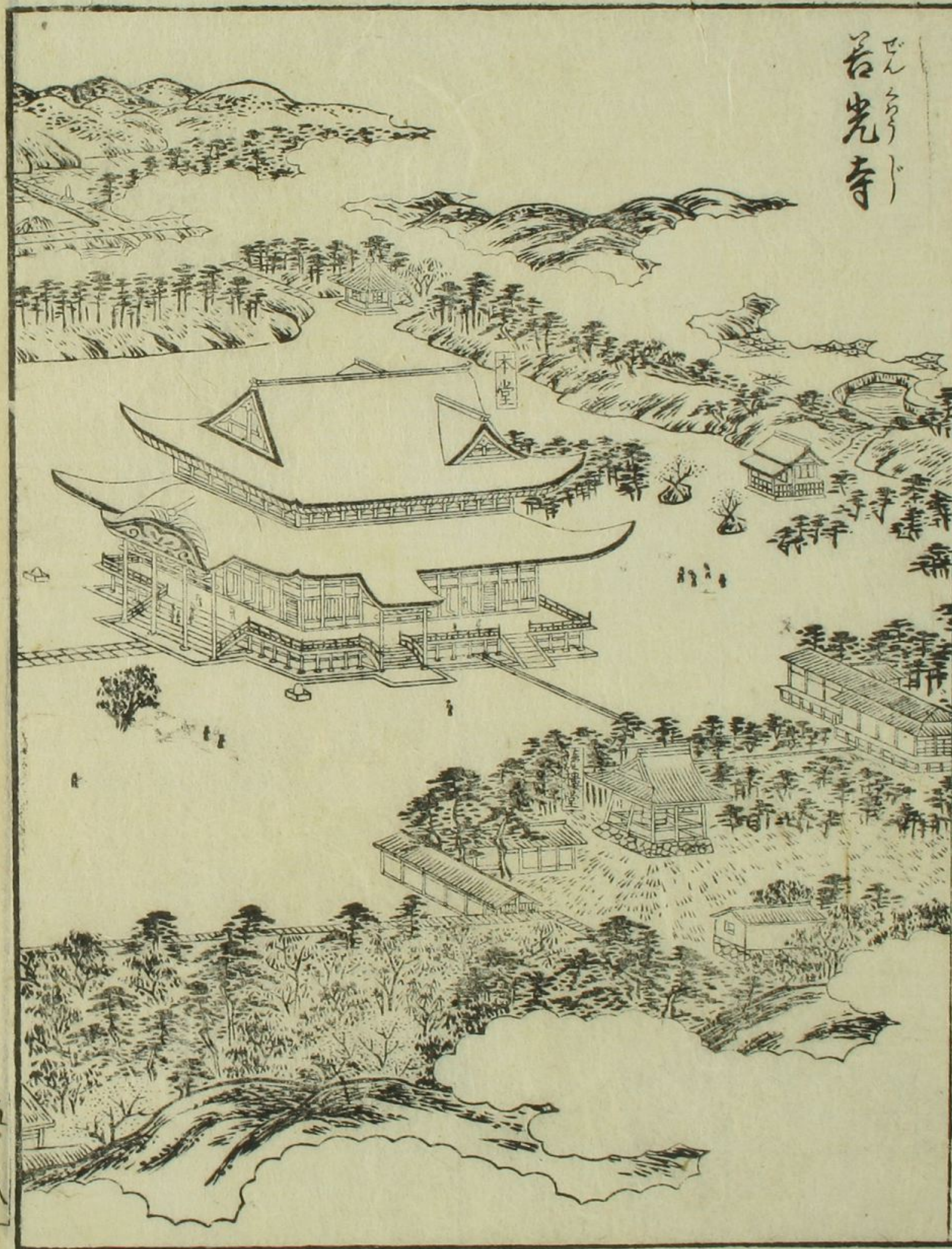
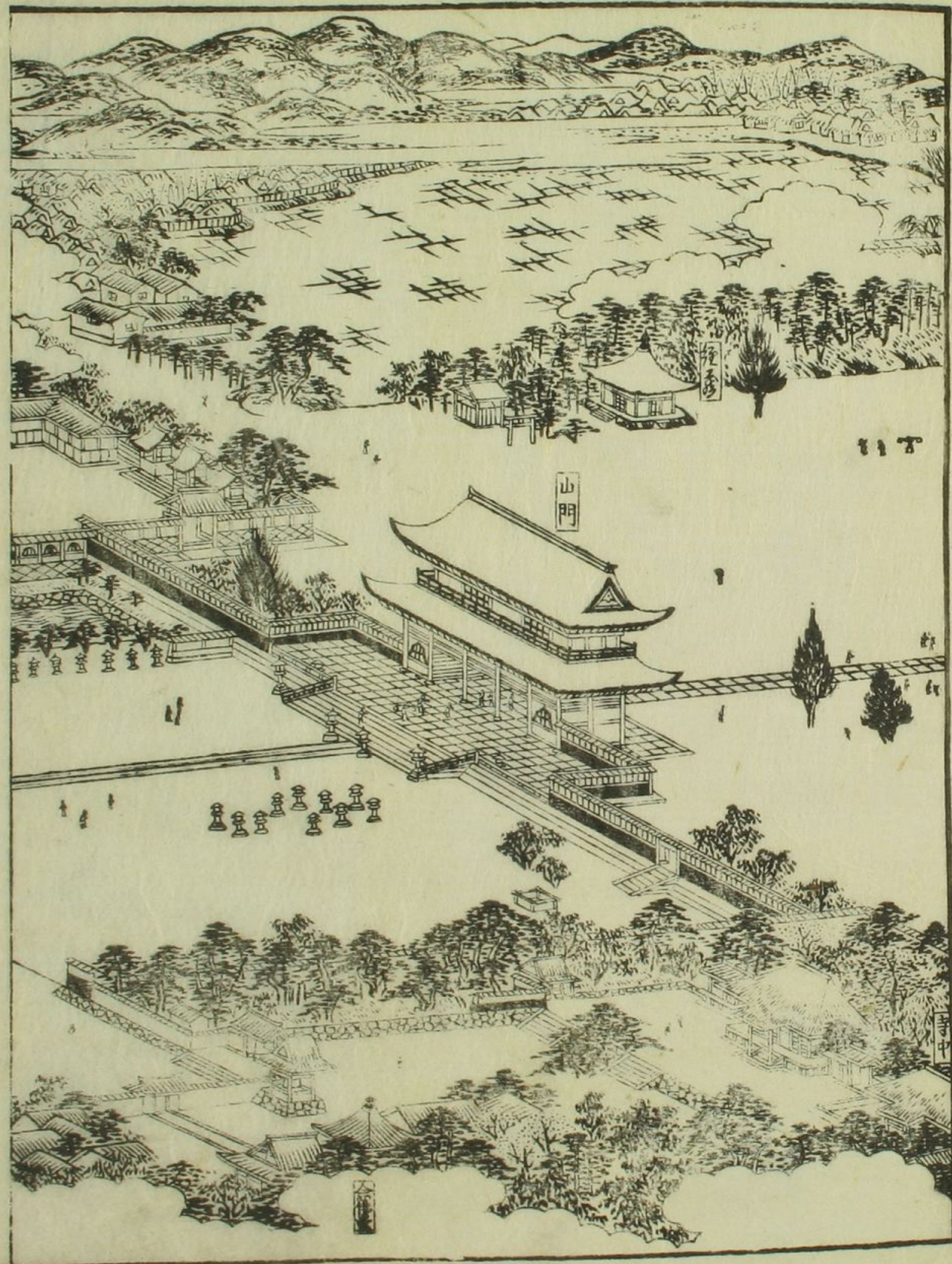
坊舎に十六區○本堂 三十一六の二重佛り表十八間  
二十九間三又檜百三十六檜 北方に門の号東ハ  
定額山善光寺西ハ不捨山淨土寺南ハ南命山無量壽寺  
北ハ小室山雲上寺とあり正南ハ破風佛あり他の堂舎ハ  
是之内陣ハ正中と限り左の間に善光善徳佛坐す其の  
像を安置し右の間の御戸帳の内御本寺御正佛坐すはし給ふ是又

日光寺の中  
の  
樹

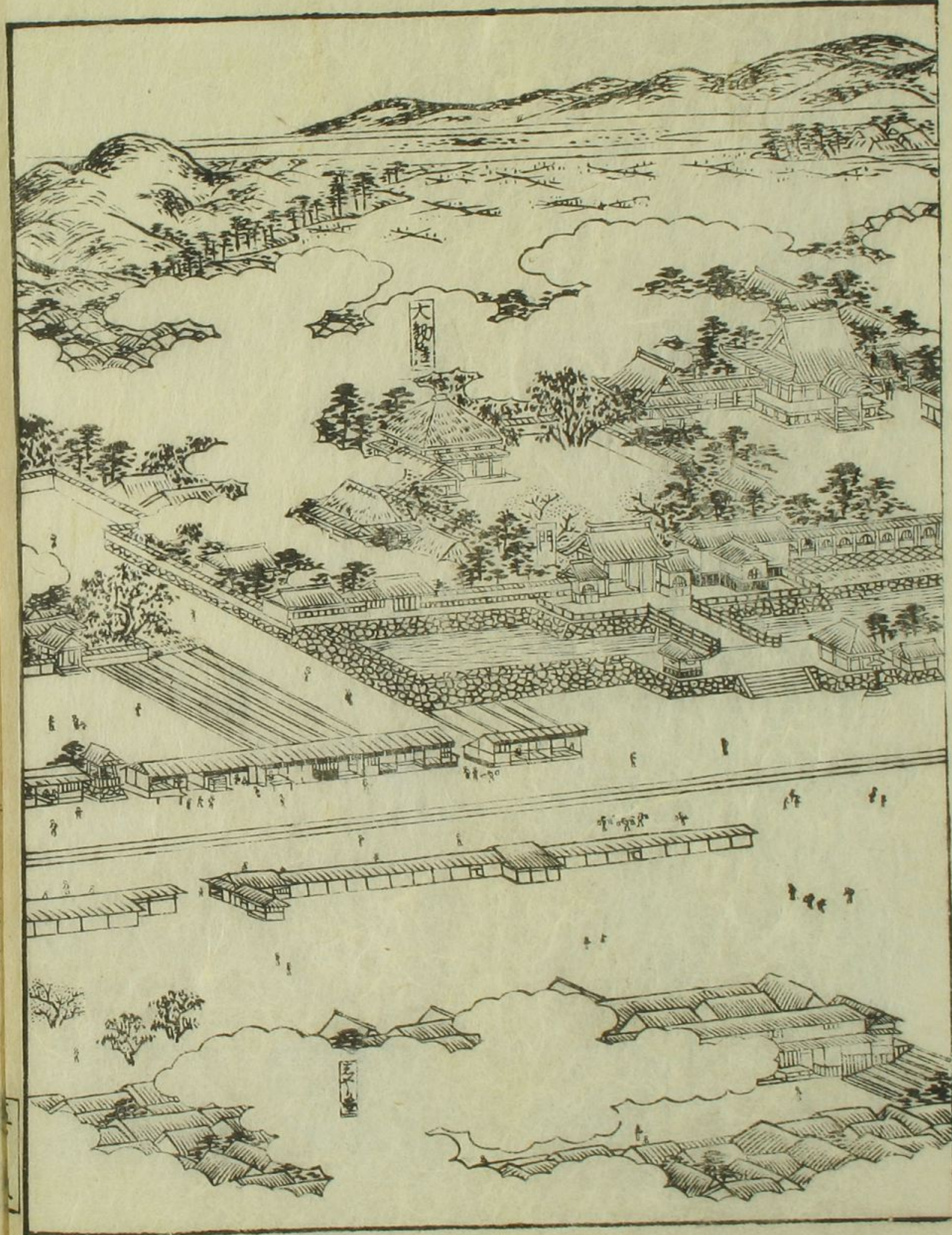
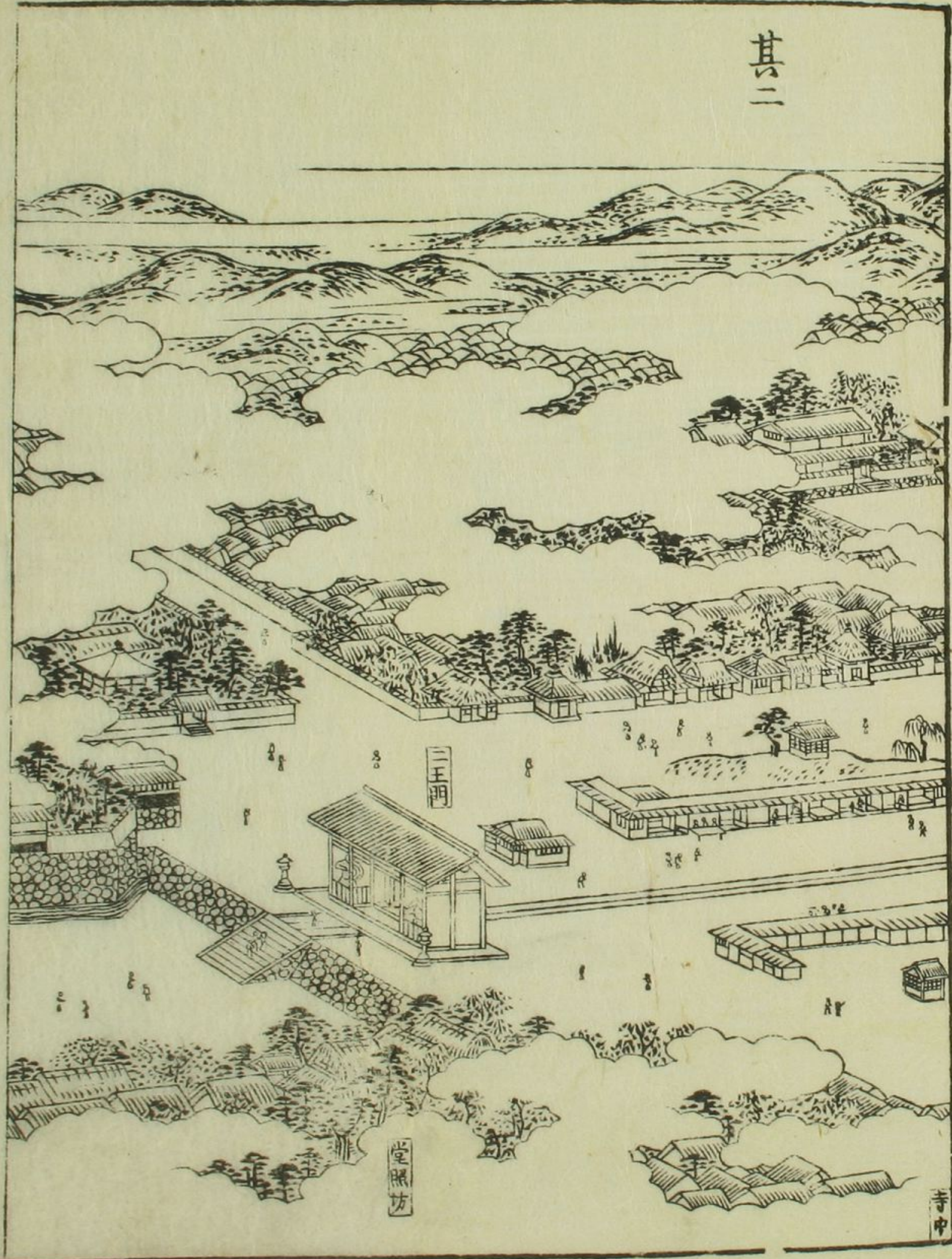


佛の堂塔を本と安蓋せり捨つるは其の往昔昔光の屋造り之に  
 卜たる堂造りんとり又如来若光の佛勅して予と汝とは世  
 人と海に捨つるありて内陳と在る安蓋世とぞ。○山門三十三  
間一三十三間  
二天 二王門 六十三間 六十三間三十三間  
本を二先三を關渡授令 正に阿弥陀如来に如來の日本へ渡らせ給ふ  
 人皇三十四代欽明天皇十三年 申十月十三日 本堂建立の人皇三十  
 六代皇極天皇の勅也 關其の本を若光朝臣

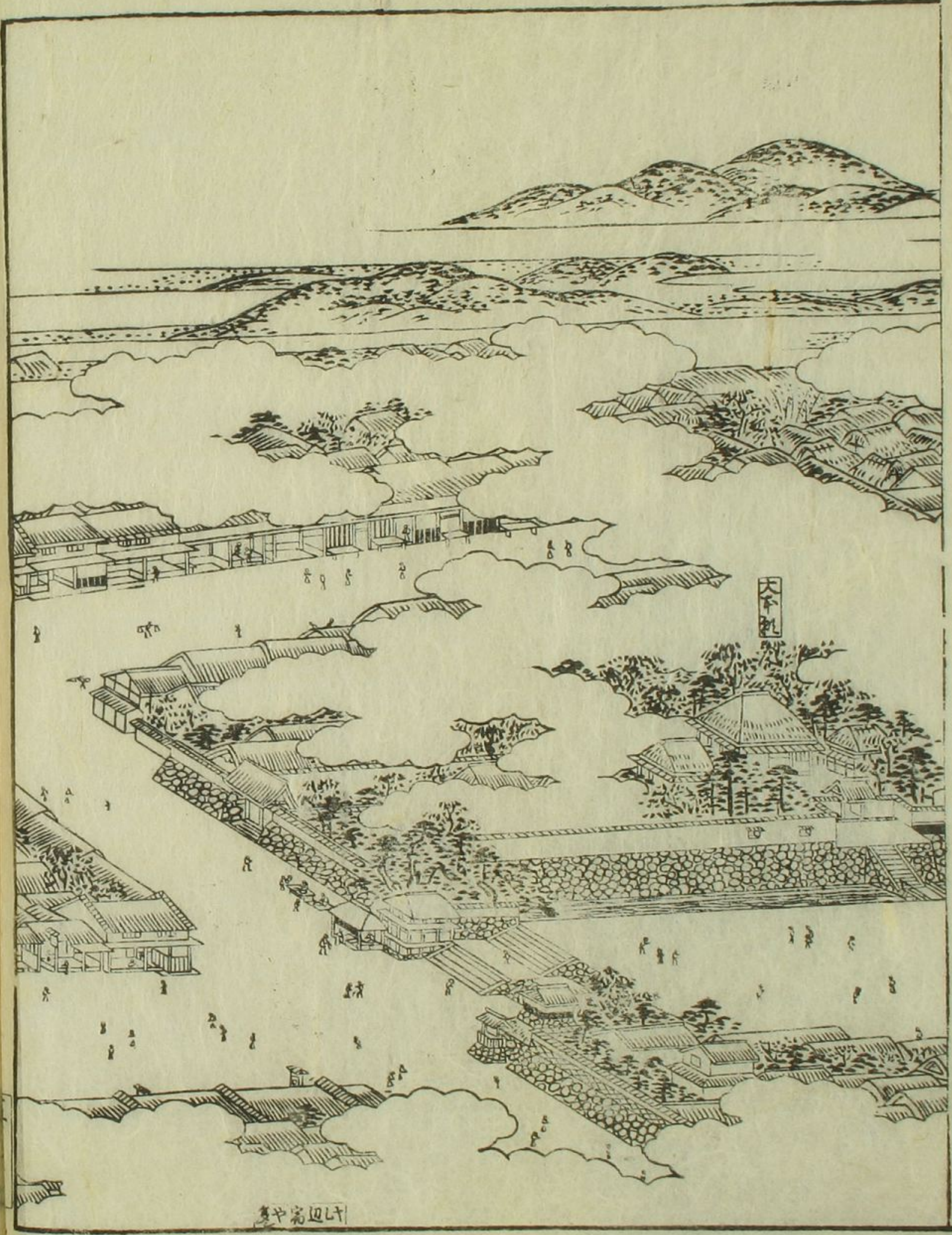
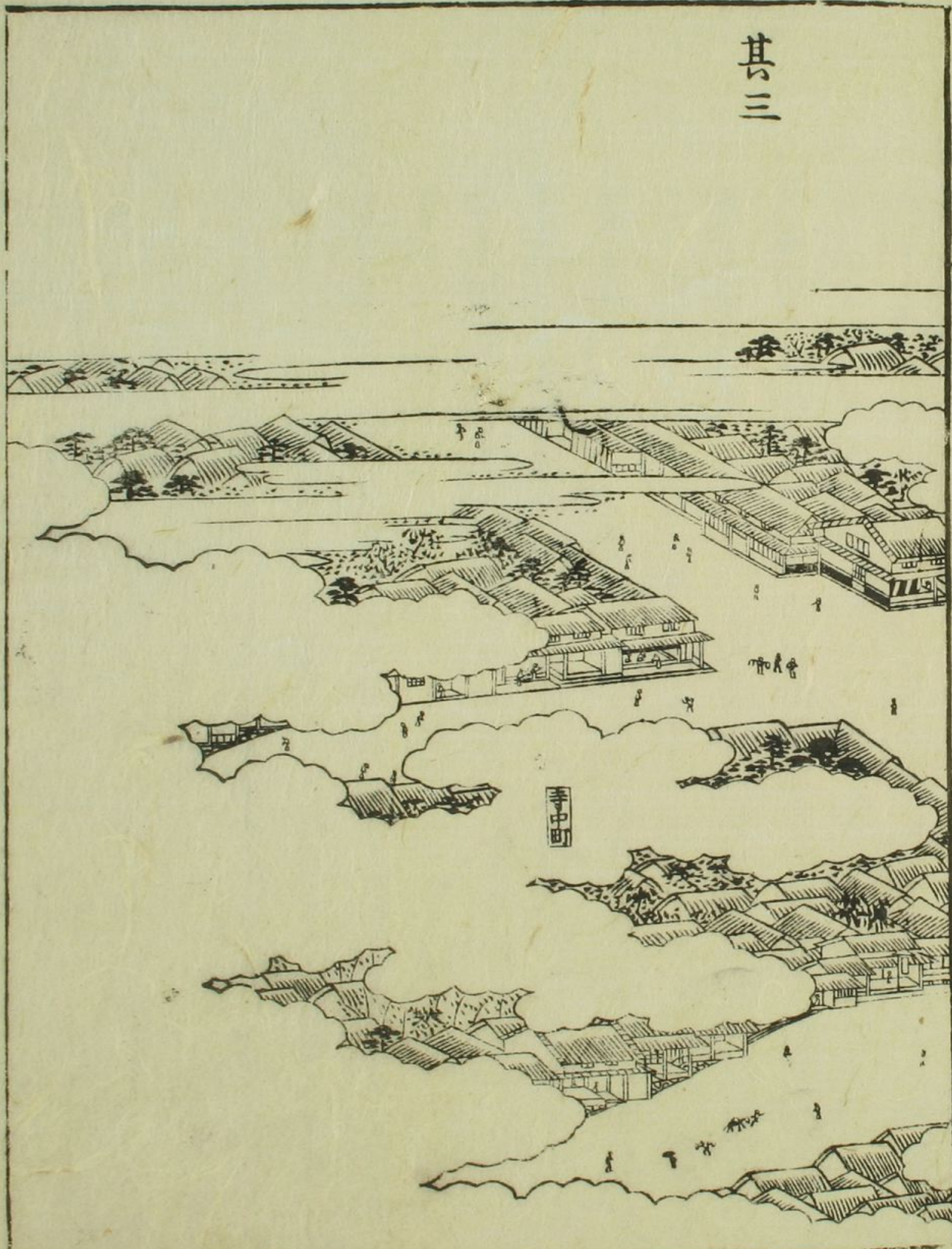
○釈為東天竺毘舍利城に在りて法論を辨じ給ふ初月蓋長者佛勅  
 又つて西方阿弥陀佛と祈せりくは忽ち長者の西の樓門に正身の阿  
 弥陀如来觀向し給ふ其の時釈是に同蓮る者か令して龍宮城より  
 關渡授令とたまふとせ給ひ高基をのせり阿弥陀佛は向し給ふ  
 又如来舎の光を放りて彼令と賜し給ふ其令其佛一先三  
 等の佛種を現し観向の三と在るに安蓋は何とこれを見給ふ  
 難く拜せ給ふ給ふ一佛梵を給ふ一佛を給て曰く海に代



其二



其三



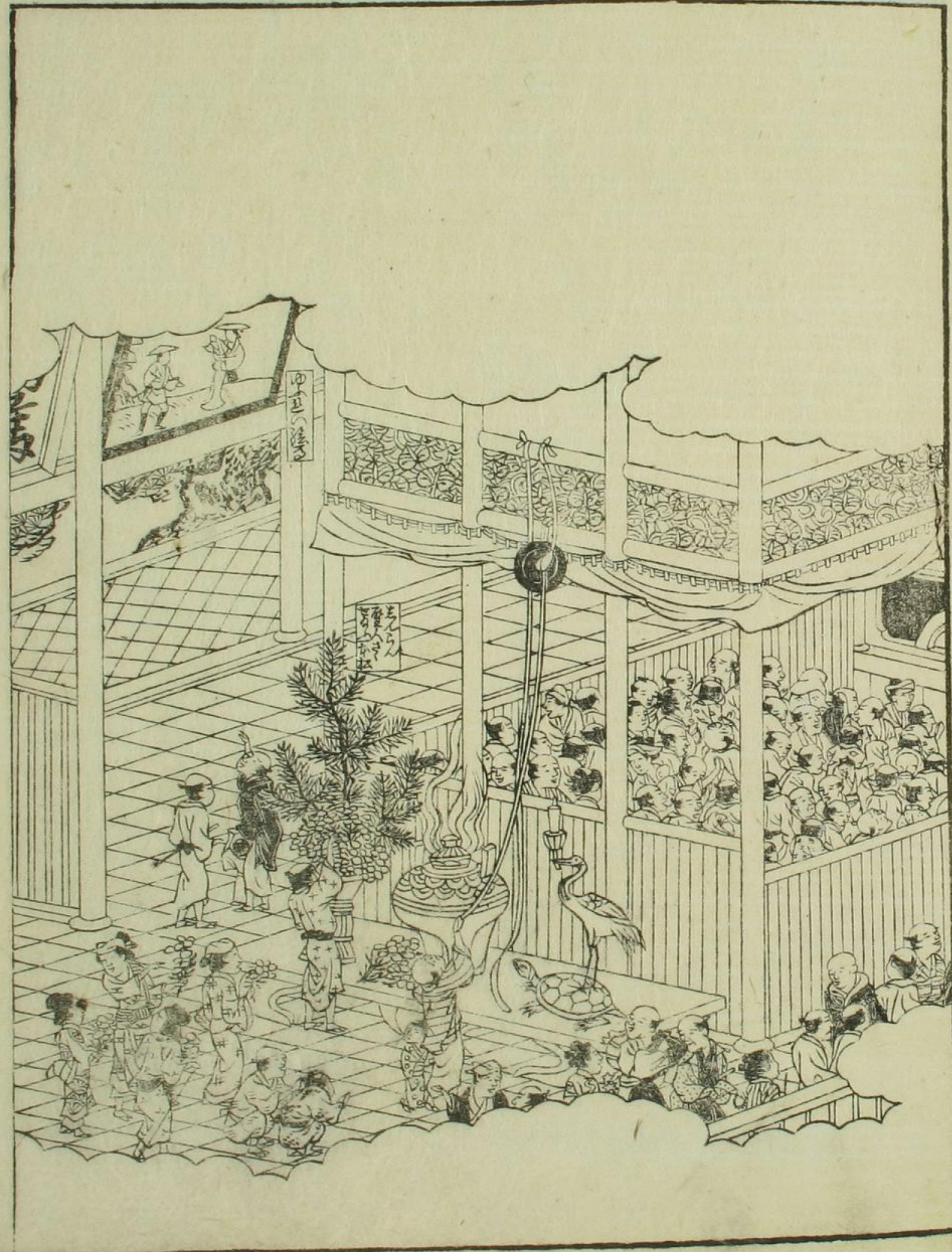
其四

安海界より東来世の衆と後とわしと記別して光明とせし  
西の負へ飛去りぬ今一佛の月蓋長者の家に留り種々の善  
五等の利益と施し給ひたり月蓋代く生きたまふけり像と敷  
せりなりが奉釈を祀して生と精し百海國を明之王とせしと  
如來も同じく百海國に飛來りて大極殿に入給ひ聖明王降く  
敷し給仕し給ひ又生と改め降敷りたり小如來異乃方候又候て  
聖明王の後方此日本又化して信濃國又生と修系郡麻績の里  
又幸田若光と号く然り小如來若光又強縁を結むる給ひ  
より人皇三十四代欽明天皇の御宇又遠川と日本又後らせたまふ  
天皇降く給敷り曾我大居士命して志浦の里向原寺又安座  
物給ひたり小守屋大連悪逆を承りて向原寺と燒に如來を  
志浦難波の淵に沈めたり其後人皇三十四代推古天皇の御宇  
大和國志浦の宮敷園の石信州幸田若光在番三事の任滿て本  
國へ歸り小彼難波の池の辺りを通りたり小如來忽ち水庭より飛  
出若光の肩脊より移り給ひぬか過去之末の末の天竺より月蓋百

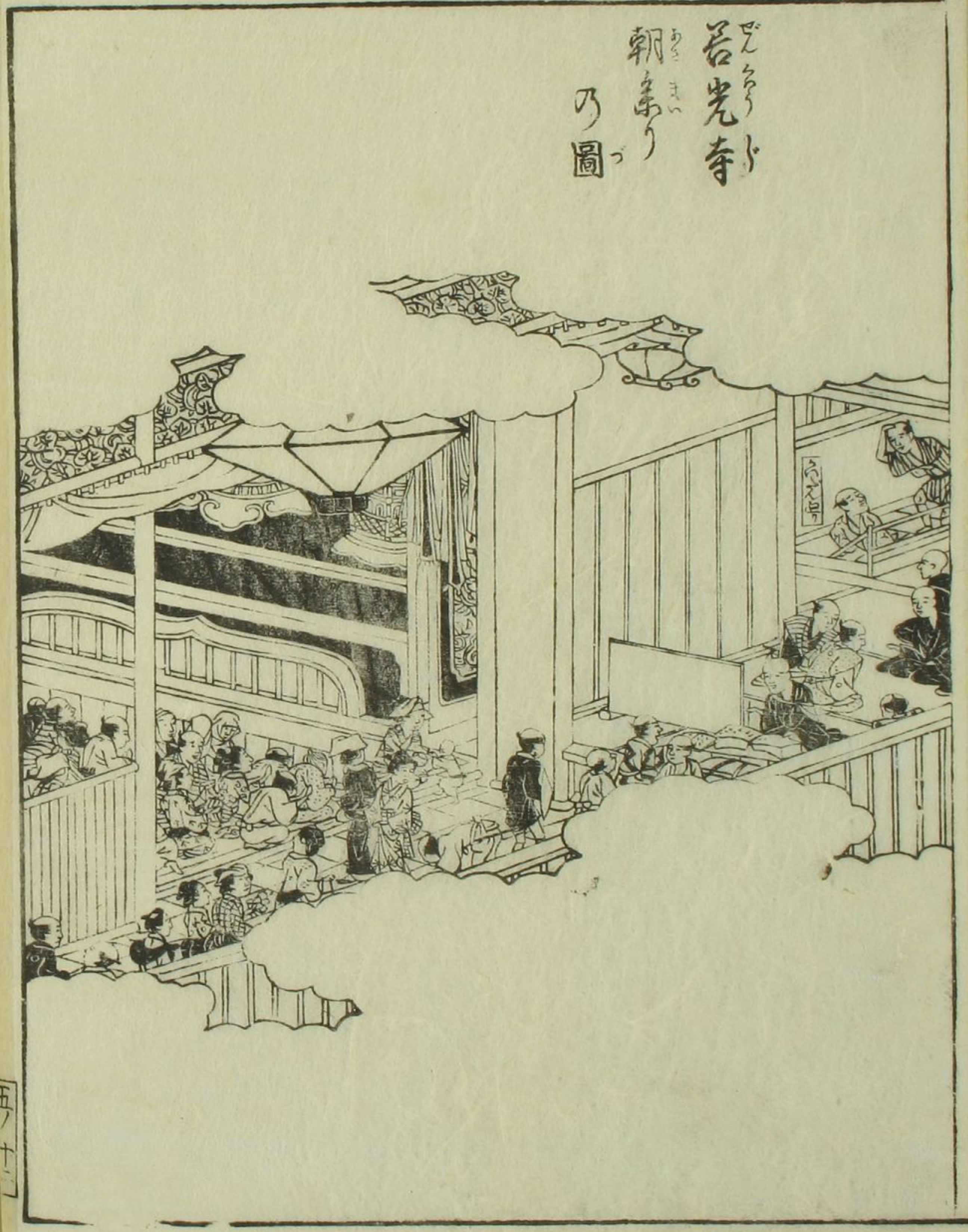
海よりハ聖明王より我ハ先阿弥陀の三身よりハ汝ハ佛と強縁を  
よりて日本又來り年久しく汝と待居り速に汝が本國より  
末來世の衆生に渡せんと明り又悟り若給ひ若光欽法の時又  
いせひつ美又本國信濃又守降りたり妻鉢生一子若佐と名  
重恭敬乃誠心と盡したり而後人皇三十六代聖德太子御宇  
て惡縁を盡せし給ひと如來これと般いせ給ひしゆみ安  
妙ひと天皇廣大深重の恩徳と思召と勅命あり六伽藍を  
建立し心身の佛侍と安ん鎮座在り給ひと  
其外東内諸堂園画の

○高祖親鸞聖人此靈場又度く參詣したまひたる龍中元仁  
二年聖人五十三歳に月十九日此御心禱一光三身の真佛と一  
分身として感徳し給ふ即野州高田山專修寺の寫像天釋乃如  
來也像記ハ高田山專修寺の所に記とらるる

親鸞松 奉堂右のる内津本寺若光之帳ハ若光界の内ニ大机あり其上ニ大方ハ  
若光又一本建らし



日光寺  
朝集り  
の圖



本回義光

難波の池

如來又福以



傳又曰聖人當寺(河系)詣(行)せ給ひ塔中の僧坊(僧坊)親證院(親證院)止宿(止宿)互(互)以(以)乃(乃)間(間)日(日)毎(毎)又(又)山(山)又(又)入(入)らせ給ひ若(若)本(本)乃(乃)松(松)一(一)本(本)と裁(裁)て佛(佛)若(若)以(以)供(供)じ給(給)ふ(ふ)そ(そ)し(し)より(より)以(以)來(來)親(親)百(百)年(年)の(の)今(今)又(又)あ(あ)る(る)ま(ま)じ(じ)一日(日)も(も)怠(怠)ら(ら)なく(なく)日(日)々(々)松(松)を(を)供(供)と(と)り(り)若(若)先(先)寺(寺)乃(乃)法(法)例(例)と(と)は(は)如(如)是(是)と(と)柳(柳)此(此)三(三)乃(乃)佛(佛)乃(乃)方(方)便(便)法(法)身(身)の(の)河(河)次(次)女(女)より(より)照(照)し給(給)ふ(ふ)光(光)明(明)中(中)又(又)出(出)現(現)給(給)ふ(ふ)像(像)乃(乃)は(は)正(正)真(真)の(の)阿(阿)彌(彌)陀(陀)如(如)來(來)乃(乃)親(親)鸞(鸞)聖(聖)人(人)の(の)造(造)立(立)給(給)ふ(ふ)像(像)乃(乃)は(は)内(内)德(德)日(日)待(待)ら(ら)う(う)と(と)す(す)も(も)智(智)く(く)能(能)所(所)の(の)形(形)を(を)以(以)し(し)若(若)巧(巧)方(方)便(便)の(の)益(益)と(と)給(給)ふ(ふ)と(と)ん(ん)不(不)謂(謂)松(松)乃(乃)諸(諸)本(本)乃(乃)司(司)と(と)して(して)十(十)八(八)と(と)稱(稱)と(と)り(り)即(即)弥(彌)陀(陀)の(の)十(十)八(八)本(本)親(親)表(表)し(し)て(て)り(り)と(と)り(り)伏(伏)惟(惟)乃(乃)能(能)所(所)日(日)待(待)の(の)中(中)又(又)松(松)一(一)乃(乃)と(と)互(互)給(給)ふ(ふ)の(の)由(由)謂(謂)信(信)と(と)り(り)又(又)感(感)乃(乃)故(故)又(又)親(親)鸞(鸞)松(松)と(と)稱(稱)し(し)來(來)互(互)依(依)と(と)り(り)や

堂照坊

若(若)先(先)寺(寺)中(中)に(に)十(十)八(八)方(方)あり(あり)内(内)十(十)又(又)坊(坊)の(の)裏(裏)に(に)如(如)來(來)と(と)寺(寺)後(後)に(に)先(先)百(百)餘(餘)圍(圍)より(より)如(如)來(來)と(と)證(證)公(公)まで(まで)常(常)照(照)給(給)ふ(ふ)乃(乃)佛(佛)の(の)子(子)孫(孫)と(と)り(り)又(又)信(信)と(と)り(り)又(又)如(如)來(來)と(と)付(付)給(給)ふ(ふ)根(根)乃(乃)忠(忠)信(信)の(の)地(地)と(と)り(り)又(又)







川中流

松



とがきやま  
姨捨山  
たごと  
田毎乃月



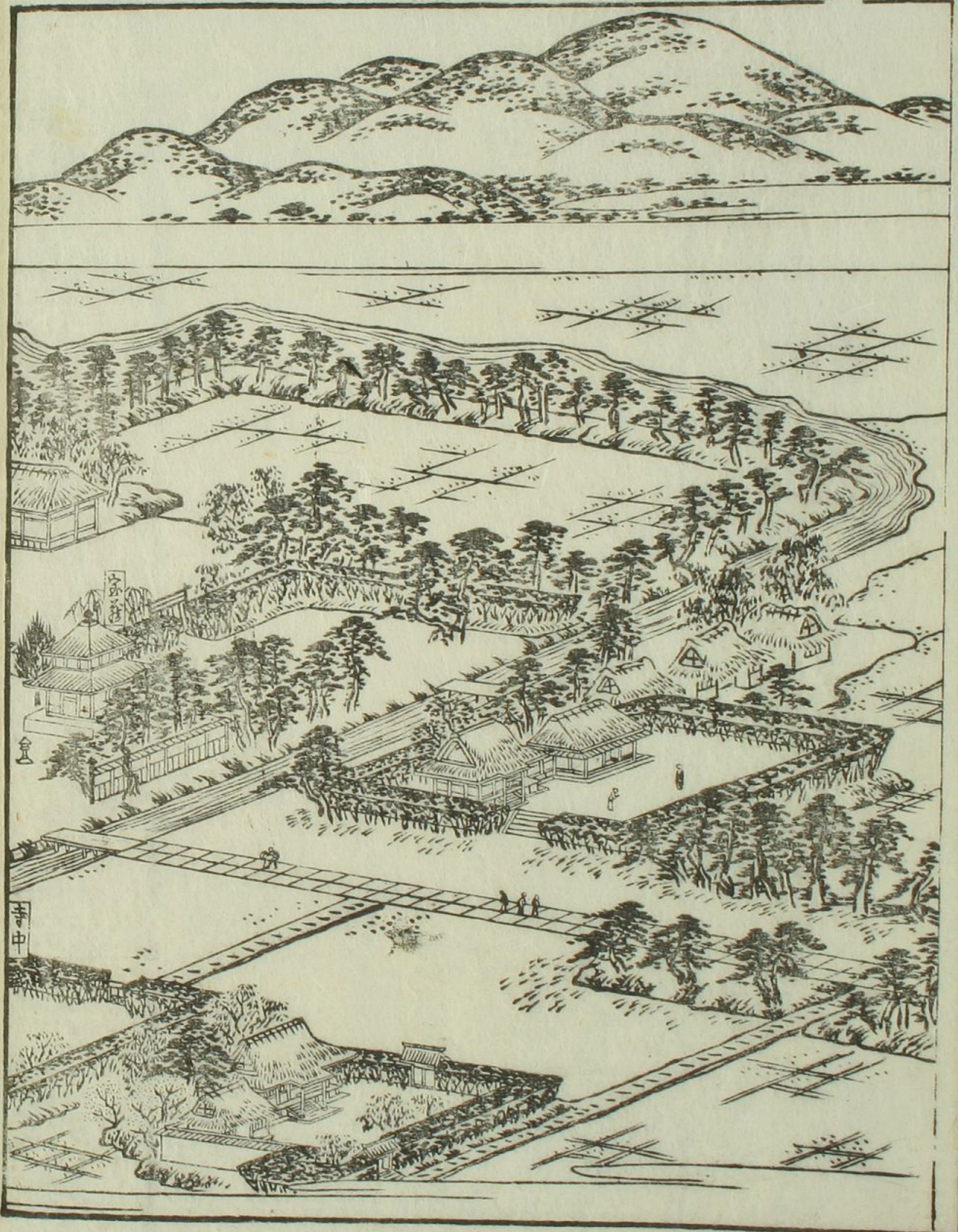
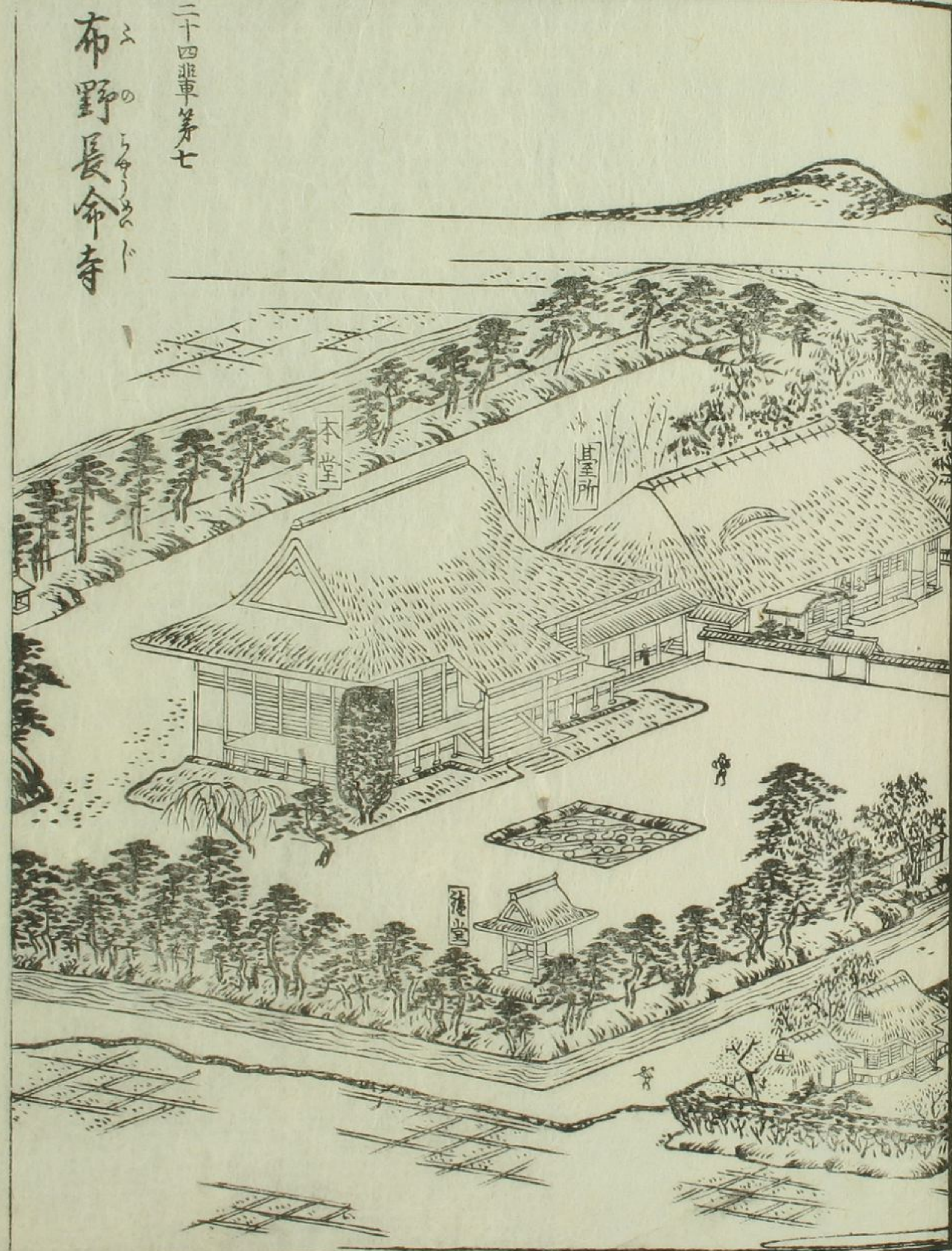


とばとくやま  
姥捨山



布野長命寺

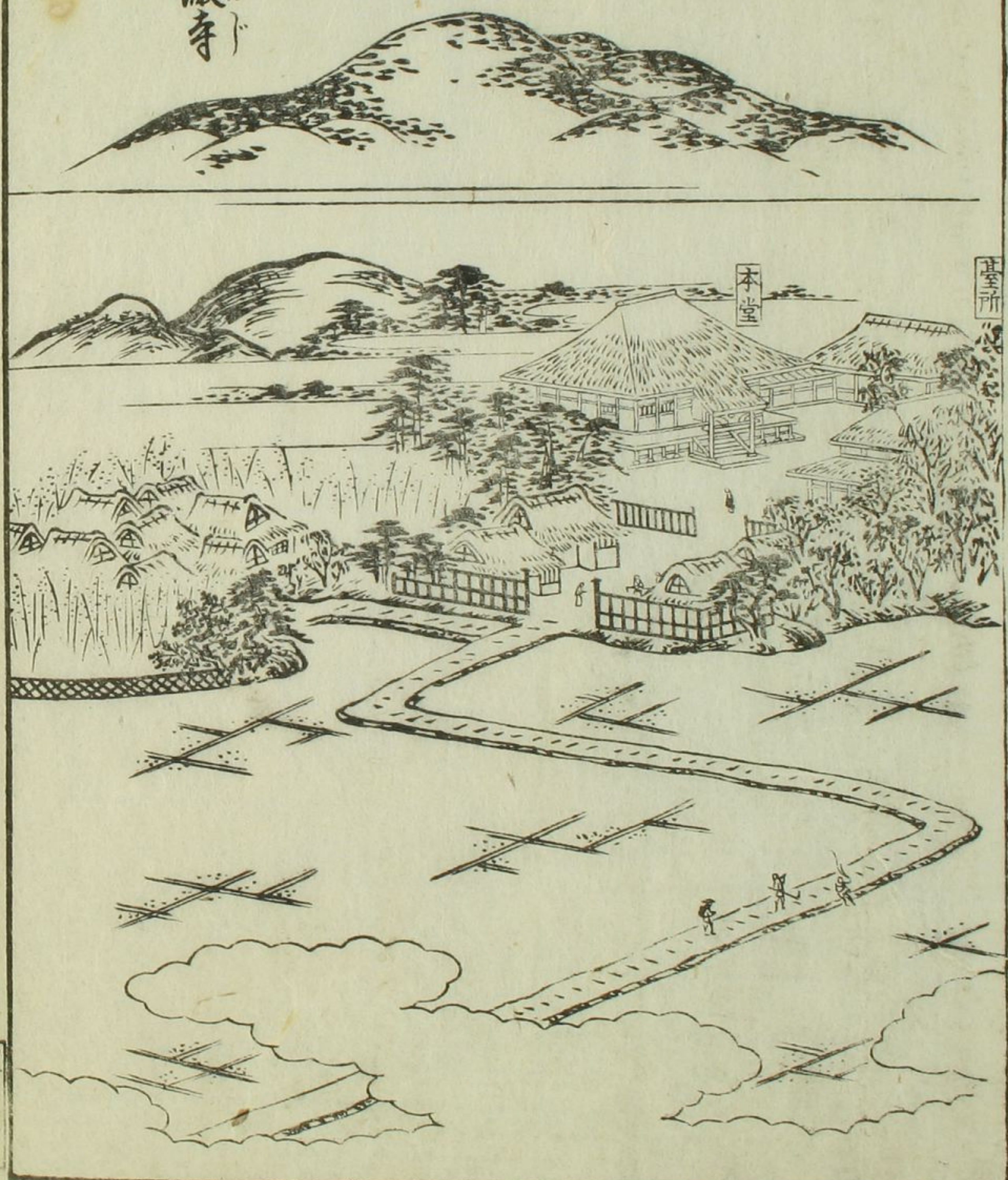
二十四車第七



を奉蒙急ぎ聖人の美房小あり發心の志如來の冥告と  
 活り伏て漸教化と歎ひまれの聖人即彼が爲る他力奉報  
 の不可思議を誇り凡そ往生乃安心とつと稱んごらよ  
 終ひるれが眞親陸菫の涙よむせひ三所に信心發得して  
 御弟子とらんを歎ひ聖人これを免し終ひ西念と名  
 を給りたる宿縁の如くぞ難き是よりして西念日積る  
 祖聖人又常陸一稱名念佛あるりなりしが後又武州  
 足立郡埴田とある所の一寺と營て専ら弘教一系  
 の宗風を傳へ祖師聖人御入寂乃後ともも孫く教化  
 壯んぬりたるが正徳三年又御奉廟弟三世免如上人  
 関東御經廻の時西念いもぞ存命して百七十七と免如上  
 人又濁りたりしが免如上人六よ歎ひ終ひ西念又附祖師

漸相傳の安心と覺終ひしは西念坊於て高祖聖人より  
 口授お傳りたる名の安心記外御傳りたりし演説せし後  
 免如上人始と歎を給ひ御坊の年齢百七とせと稱り極  
 衰老の老毛言忘失の語りもなき小其言語何ぞや小聖人  
 の口授也ししは遠忘るく高祖の遺説とけよ異なりは實後  
 稱せらるる余りたり是令く命齡の長たる徳なり自ら己  
 後け寺と長令寺と号はせしと命し終る干附西念御坊  
 其御三十八歳を命終し三月十又日とせる惱もな  
 端座合坐し觀彼如來本報力乃文と漏り念佛教百篇  
 唱へりこと小息終大往生と遂に弟二世の恒免念坊も  
 聖人の遺弟之也又長令寺より延享二年又九十八とて  
 寂を以る弟三世西祐坊の附建武の元と寺と破却せし

成田山 西蔵寺



佐州約濲の関基西念坊の故郷に在りて長命寺を再  
 由一前後又代を継ぐが第七世信貞坊の時堂舎を  
 日郡布陣と移し享保年中又入け南極より移て万代と  
 不易とせしむ○靈室十字名号 聖人御  
 簾の名号 聖人御細直名 ○九字名号 聖人御  
 西念坊乃像 聖人御細直名 ○六字名号 聖人御  
 御名 ○六字名号 聖人御  
 御名 ○六字名号 聖人御  
 御名 ○六字名号 聖人御  
 御名

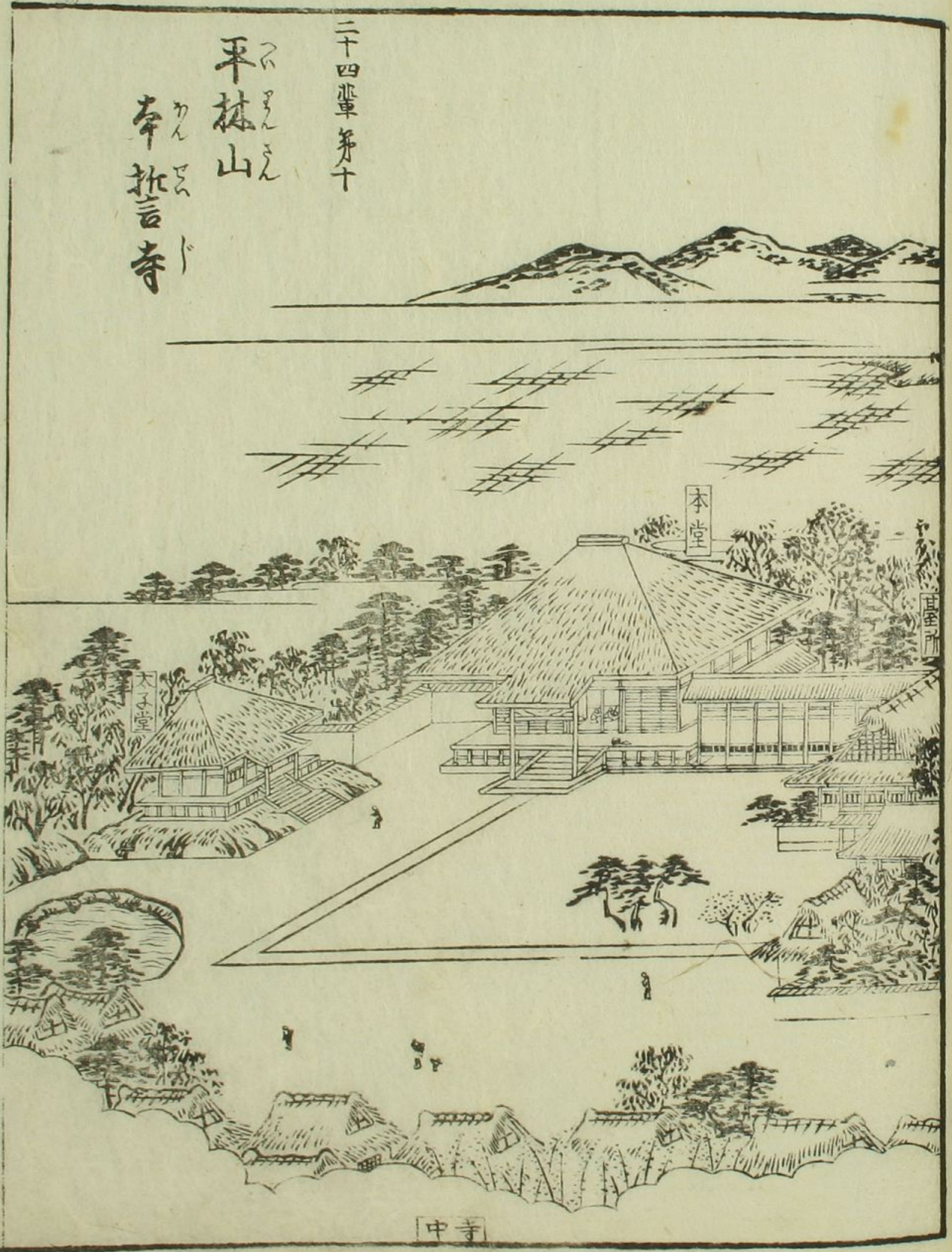
成田山西蔵寺

東流 南極より三千丁長沼あり

本寺阿彌如来 本堂九間蓮師堂より蓮如上人御自畫  
 の真像を安と○尚寺開基釋室法其信姓の武藏國西蔵  
 成田平山の三男成田下總守とく者これなりる祖聖人  
 本所經理の初若縁く小熟して御教化と蒙り御附身と  
 一寺と建匡て真宗を弘通し西蔵寺と号以○十字名号

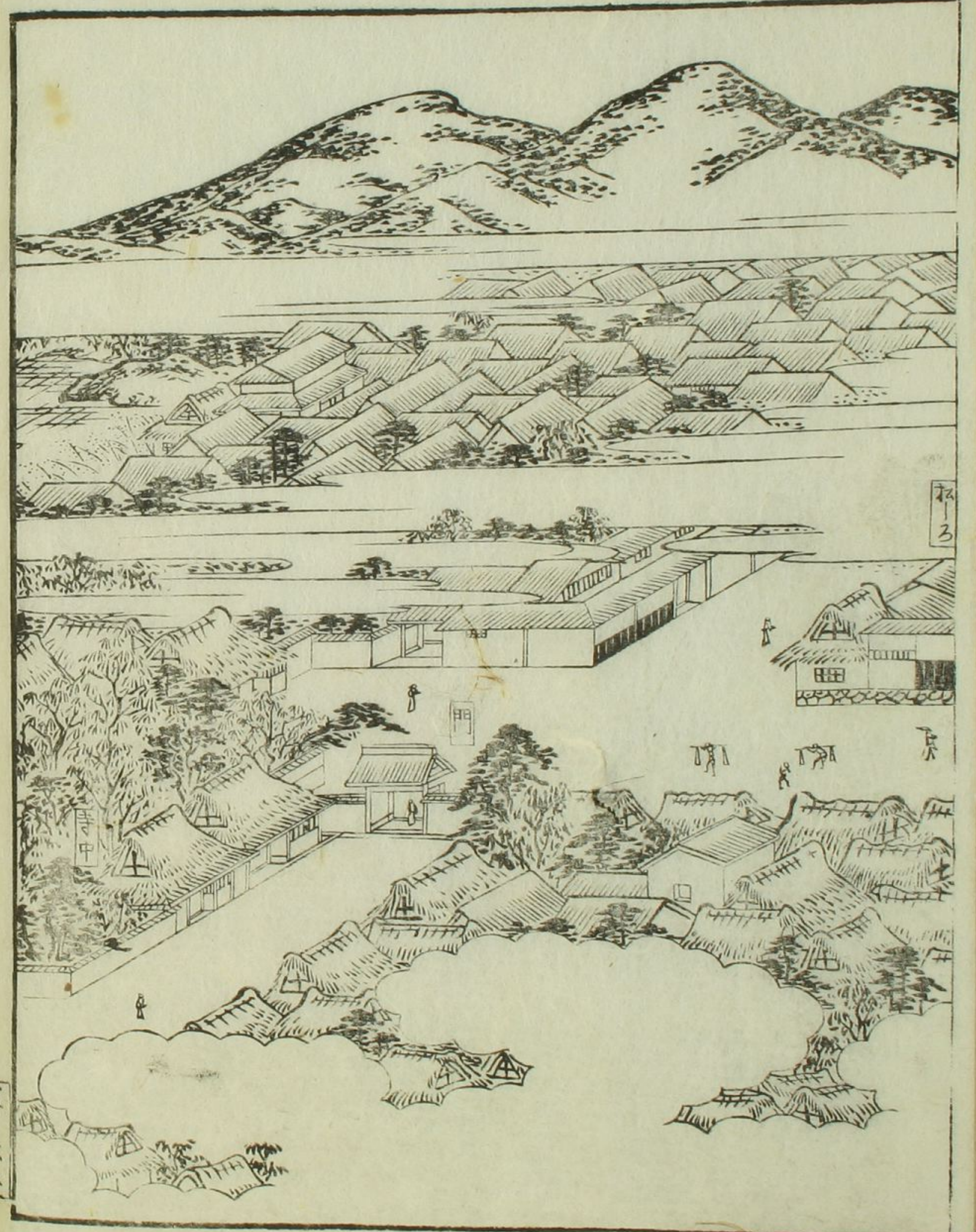






二十四卷第十  
平林山  
本誓言寺

中寺



中寺

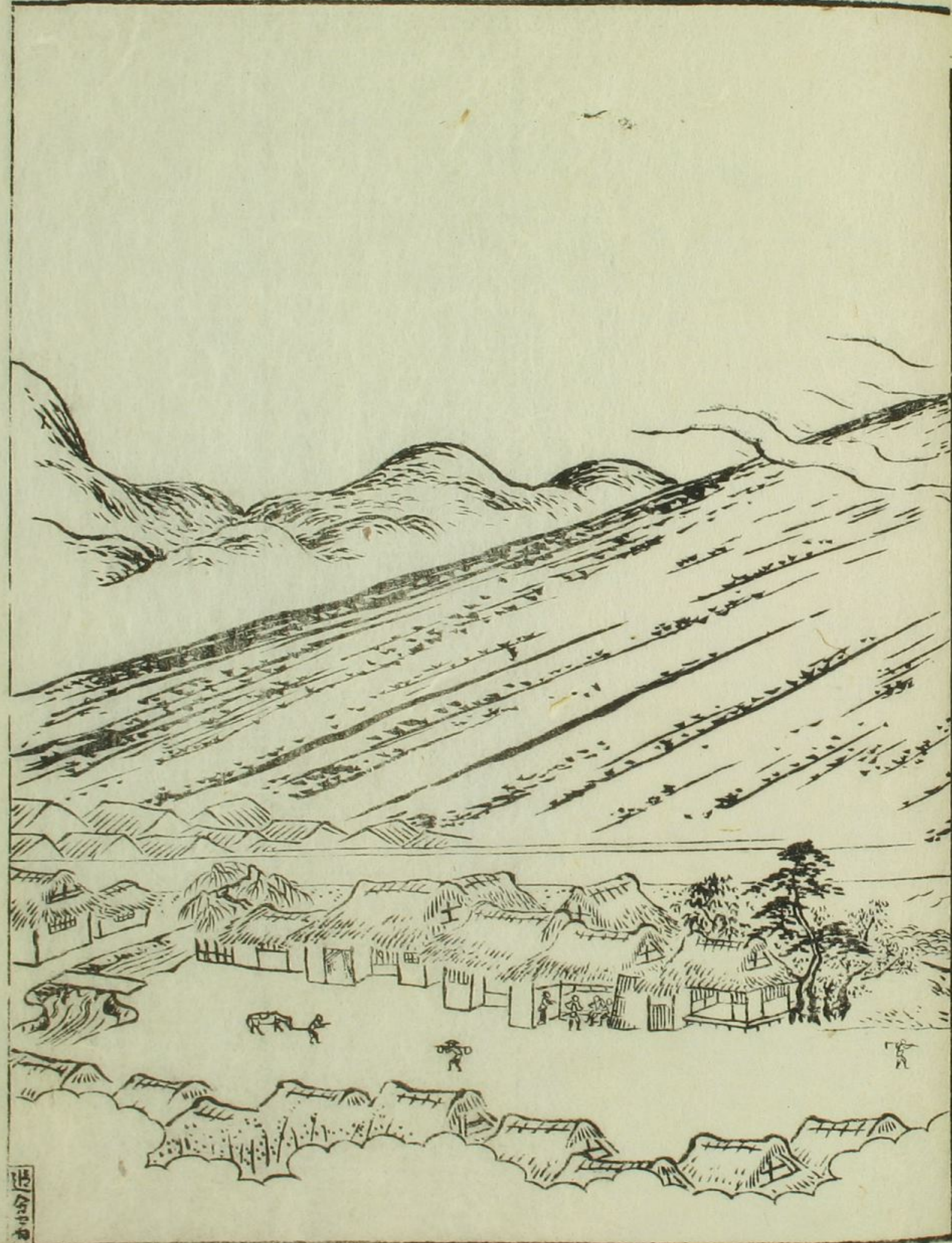


激てろろ  
阿あ弥い陀ど  
如にょ来ろの  
伊い来へ









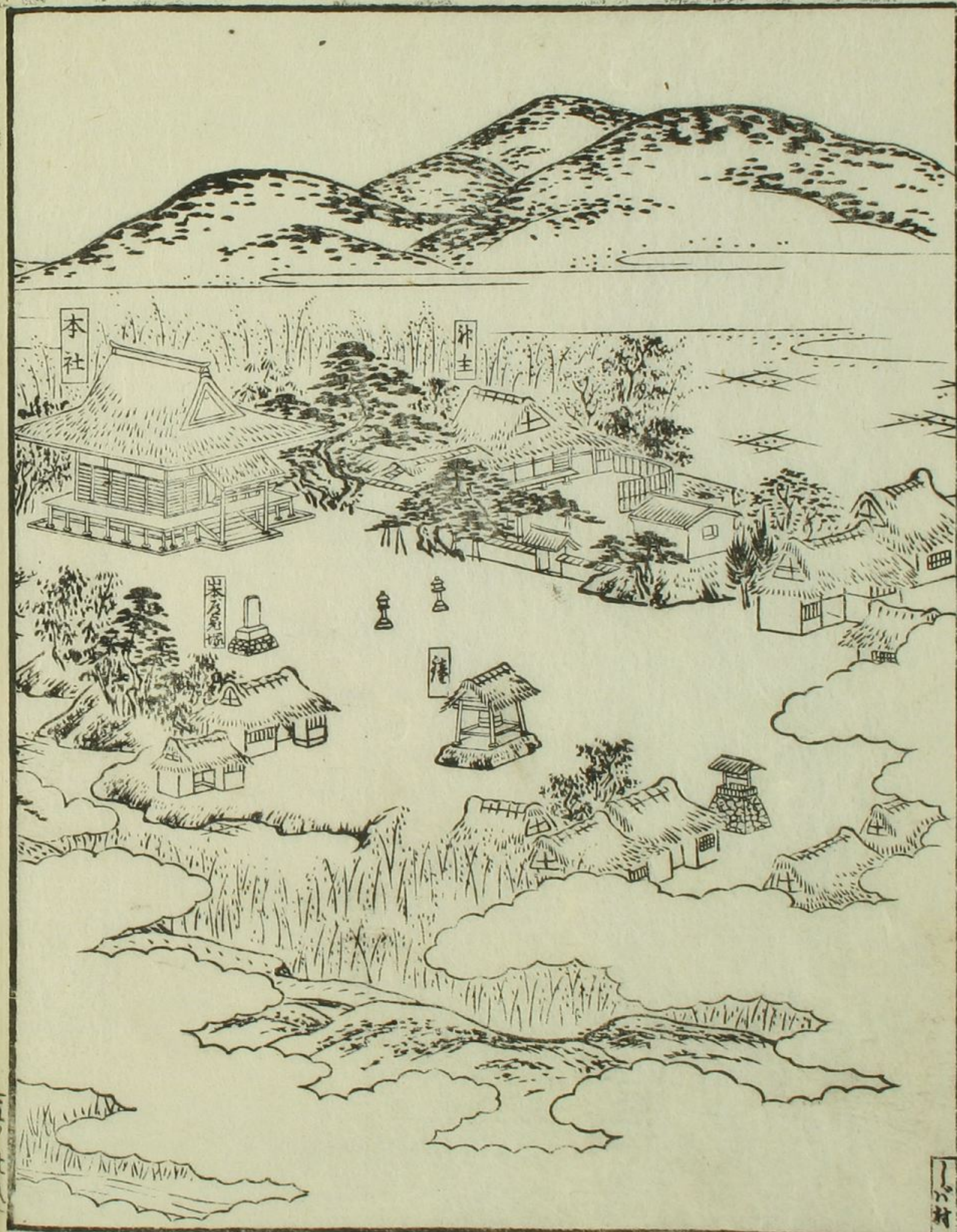
五ノ九七



浅間山  
あまのま  
が

五ノ九七

阿彌陀堂



名号乃奇特  
免を  
圖





追分の茶屋



此等と云く信濃國へ行く者少く侍衆心細く經追分を去りて今  
 日迄を強きんよと云ふは方りなく此茶屋の宿屋に宿りて中へ居て居る小  
 侍見物焼く若や此茶屋の中へかゝるやせんく被茶屋の口方と云ふ  
 て焼立るふお茶屋烈く火焼地と云ふは煙を又敷ひにしり廣き茶屋  
 と此茶屋の中へ焼立し今火焼ありとも火の中と適出んよと云ふに  
 久茶屋と焼立しと云ふと飲ひをりぬまると小茶屋に即が居る遠うり芝  
 田又同むうり焼立にたり今火焼ありとも火の中と適出んよと云ふに  
 村雨の一まきり降来て猛火悉く消しぬは茶屋に即奉き命と助うり  
 まいと云ふ名号の御利益ありと云ふは信仰肝又微し今暇下乃  
 急難を又敷ひ給ふりましてや後の世三惡乃の業火と消滅し安ん  
 び迎へ給ひたり何の疑ひもなきと案外なり此即け茶屋に結  
 び剃髪し法名と姓西と号し静寂として念佛して居るうり平尉永福に

年の夕とりや西軍入る信玄大軍と引て出陣し赤の方と争ひ足利が芝  
の中よりに十八石の光明なるひき月久より信玄懐疑をひ被光明なるを  
を召見給ふは西軍の角より出る光明なる角の角を伺ひしは西  
軍の角より出る信玄念佛してあつるう壁に掛たる名号より被光明耀る  
信玄奇異の心ひ道に居るを向ひて夕の候と召見しが西軍の  
月内し夕とも物語即ける名号の武運長久之守りより親皇聖人の御筆  
と委しくかきりやろふ信玄詔勅ひは之れ我今戰場に向ふ武運長  
久の瑞又遠く今日の合戦は勝利と得るの疑ひはしとく名号を向ひ合  
新田に雲軍陣は録して保して其日十分の勝利と出るは録名号乃  
加波刀かりとく其時の陣巻を以て巻と建立し西軍は信玄阿弥  
泥乃未也也其外阿弥陀乃畫像甚師如來の畫像有鐘の銘は阿弥陀  
葉師降應之地と記せり

宝永の元亨元年の紀とて信玄が徳田郡藤原寺の修也  
又頼後國守田原波岡郡藤原寺より信玄阿弥陀と記せり

白鳥山康樂寺

西流

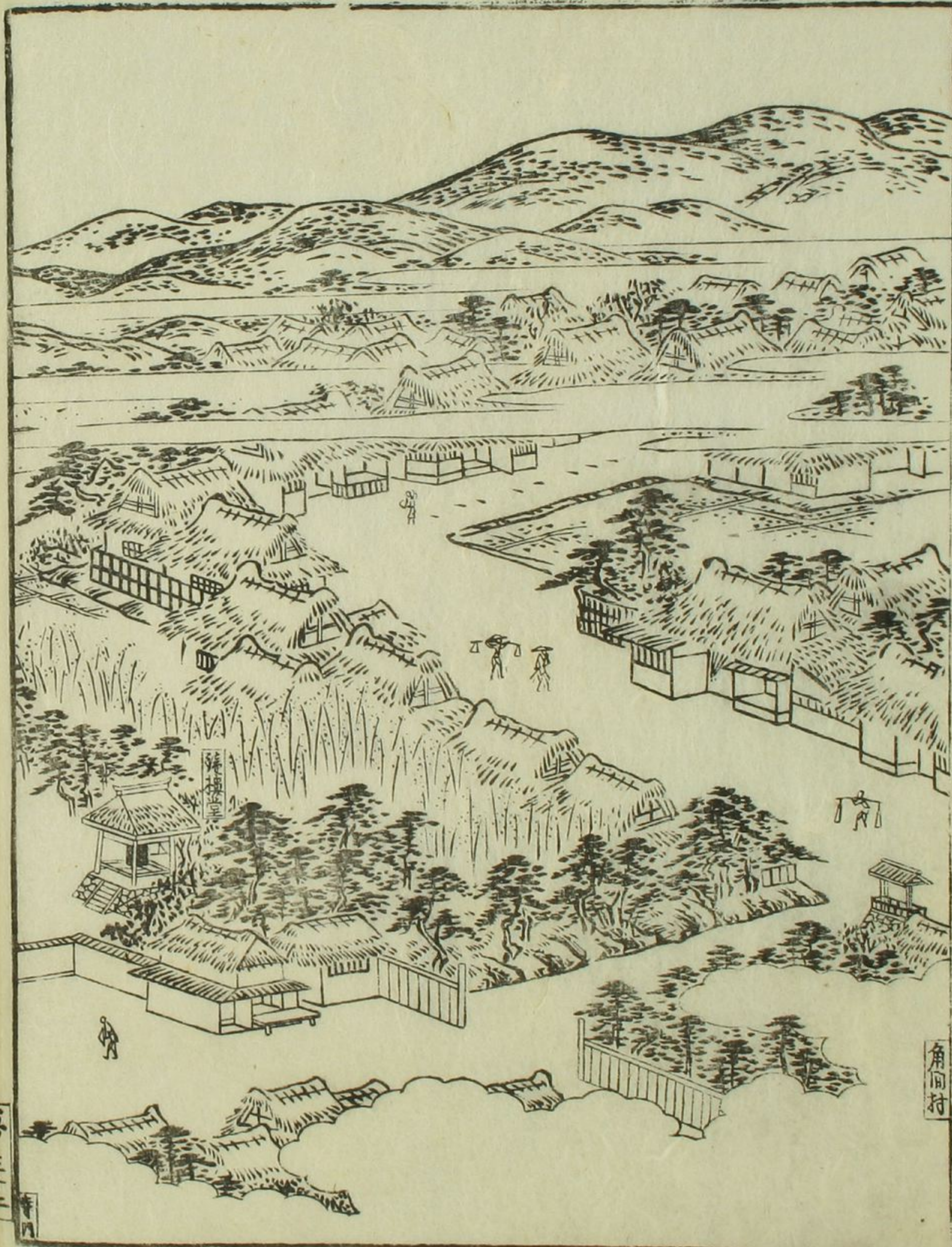
此本村より二里半程あり

親信法師と号し本堂十三間口面本寺阿弥陀如來坊舎三區〇用  
基西佛法師 法持と人の名分ありが序後より 西佛法師乃信姓を信和  
天皇弟曰の皇子滋野親王より九代の後胤海理小右郎源幸  
親信法師の子なり始り信和に仕して勅學院乃文藝博士  
進士苑人通廣と号せしが出家し西乘坊信敏と号し南都真  
福寺の學侶より後叡岳に登山し慈徳和尚の門下より連  
寛と改号せり 本寺義仲の内内は信和の屋敷ありし縁書の間へるは頼朝の御筆  
ありしとて義仲が親書を以て八幡宮へ納めしとて信和の御筆と  
いふなり け時高祖聖人の範宴少納言の公と号していまは御初推  
ありしとく徳明博識して一聞を信乃慈其蘭の白鳥山  
と兼て是より信和の和尚の親筆を衆に教人なりとて信和

未詳

未詳

白鳥山  
康樂寺





ひはつと淨寛とけ若乃受して佛菩薩の化現して後らせた  
まふと多く敬ひ多々ふけはるる靈友と交度まふ  
感多一うびの軌宴云佛身又現し後と看る今一うびも  
親自在菩薩現し後を拜礼し忽軌宴の云と化し後  
と月々く若の靈友又よ門く淨寛為重せりる日素又場と  
至平耐高祖聖人二十九歳はして法統と人の禪室又より念佛の真門  
又入後ひ一時淨寛も湛又性ひ性又室師乃會より連りて  
御弟子ともあり室師より法名を西佛と賜りたる法ととも西  
佛の亦より高祖又後依し信仰深固の友よ門く若水の  
門より性せ後らるる法の上人是と知らせ後ひ西佛にて  
聖人と是乃弟子とに後ひたり 西佛坊の聖人より  
年餘十二歳長き 高祖聖人誠  
後へ元遷の時も供奉したり 西佛坊の聖人より  
年餘十二歳長き 高祖聖人誠  
後へ元遷の時も供奉したり

淨治乃くせ後入初 女曆乃  
始の年 西佛又仰らるる曰く休年齢とて又  
多しと人とも小濤園東經廻の向後よりして我化養と賜け  
たる多 誠又満足せり自今ハ汝本國又歸り專修念佛と  
弘通乃くこれ正又我又為院みえより百倍の本屋を又  
しと後へせ後入ハ西佛聖人又別をなるもの云と割がとく  
悪くいふひ性とも師命乃重きと背き難く懐せ飲養  
しなり本國信州へりる始め海陸店白多又一字と用き  
壯人又真宗と弘め後又塩橋又一寺と建立し 氣を康樂  
寺と稱し西佛八十又歳仁治二年 丑年正月廿八日入寂  
とて云云 ○靈室宝物九字名号 大師流りて  
聖人の御書等 ○十字六字名号 所  
を願ふよ ○石標名号 月御等安貝  
二年とあり ○三部經 御日 ○大般若の切 聖法  
の尊是即 ○愚亮の御 聖人三十七歳御自畫有後  
傍形之御案案御首卷あり ○法統と人の



御像 是は高祖上人の御像と云々... 御像は高祖上人の御像と云々... 御像は高祖上人の御像と云々...

西佛法師の像 西佛法師の像... 西佛法師の像... 西佛法師の像...

御真骨 御真骨... 御真骨... 御真骨...

身代名号 身代名号... 身代名号... 身代名号...

扇子 扇子... 扇子... 扇子...

其の外 其の外... 其の外... 其の外...

大宝山正妙寺 大宝山正妙寺... 大宝山正妙寺...

高祖聖人直弟子智法師の用基也了智法師と云々... 高祖聖人直弟子智法師の用基也了智法師と云々...

信姓多天皇の後胤近江源氏佐々木に即高綱と云々... 信姓多天皇の後胤近江源氏佐々木に即高綱と云々...

武士之源朝作皇國の義兵を揚げ彌平平氏と討んと... 武士之源朝作皇國の義兵を揚げ彌平平氏と討んと...

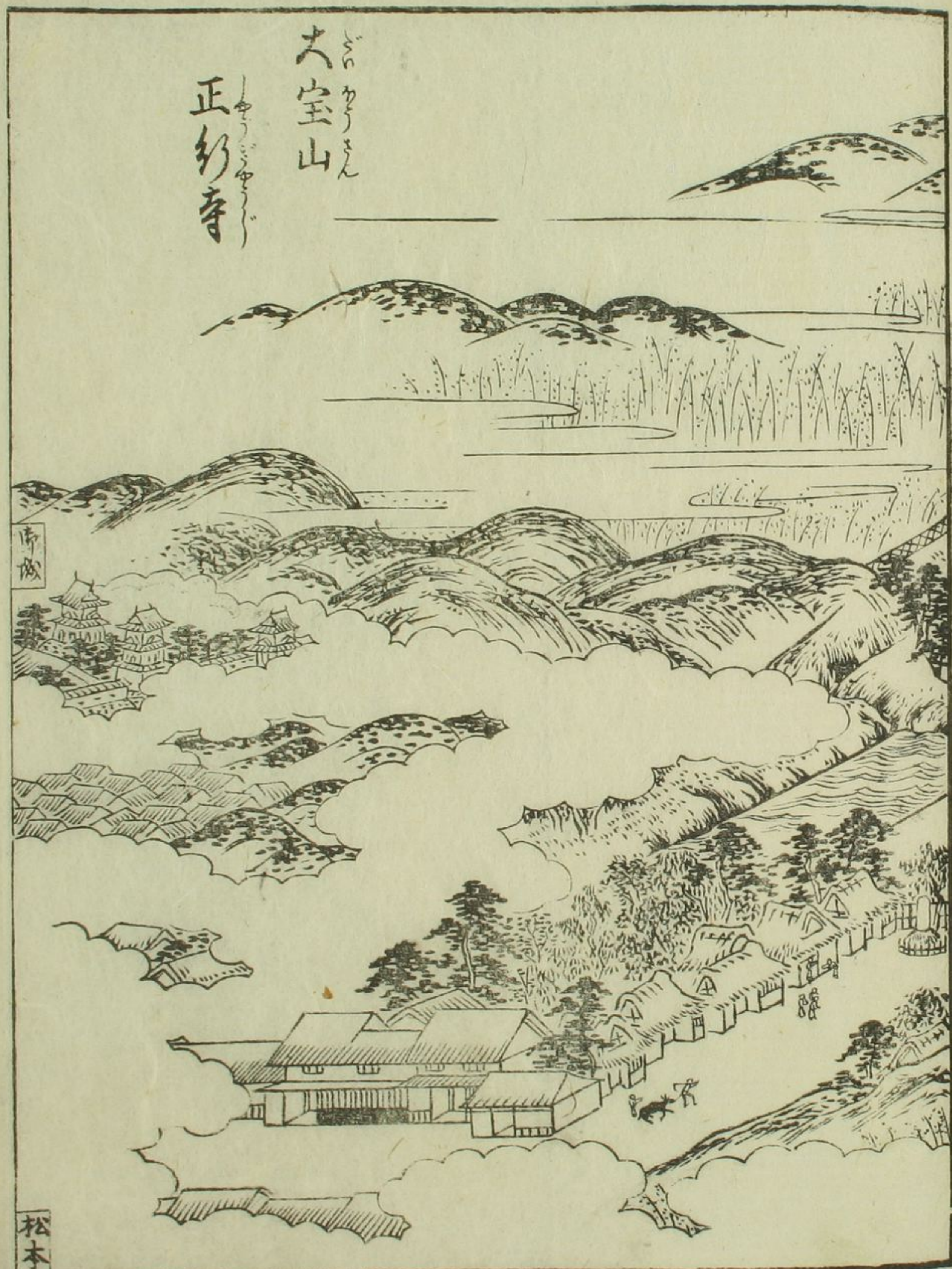
相州石橋山太合殿又叔父... 相州石橋山太合殿又叔父... 相州石橋山太合殿又叔父...

乃秋山まを遊のびつる小平家の勇臣大庭三郎大軍と進進と... 乃秋山まを遊のびつる小平家の勇臣大庭三郎大軍と進進と...

つうは府朝既と危うもつる小此佐々木高綱一人群を歎の... つうは府朝既と危うもつる小此佐々木高綱一人群を歎の...

中又去てりし... 中又去てりし... 中又去てりし...

大宝山  
正妙寺



松本



本堂

客殿

住持所

石塔

長徳寺





より保して朝の威勢日よ朝日のごとくはしり繁榮の  
卒家の一族悉く西海の波よ深流をせ終るまじ及び一門  
残るごとくを巨泉の後中又尊王朝天下と併居し徳美  
大將軍の重威と賜り割へ國よ換進補佐と盡く政刑悉  
く朝朝たる衰えありとんは依る本高綱よは約束のどく日か  
中國と賜るべきふたはくして修よ中國七州の目として是と  
たる爰よ抄ひくも綱其誓約の遠ひたるは憐れむひ且信  
世のありとまを親しむる小嗚呼後世は只持愛のあひあて  
今日とるゆは聖日の爰易に我にして我事と定むふかき  
易き況や他人の詞ふ抄ひくをや今欽樂の床よ拵る後  
河原の大城よ向ふ假令天下と一統ととも唯爰の戯とさか  
り人豈人をして眼むぐんや又欽の希と念りて三毒の酒は碎

則んより善徳のるふ入く佛果は悟らんふは志にして忽  
ち高野山令剛峯寺よ登り出家して弘法大師と信じま言  
密法を修めたり猶とも難妙のる遙く遠くして外は  
り不徒妄念の周小迷く昏くうりも綱入る難解の機  
難きゆを悲しむのるよ名徳の若國爰よ拵くふや聖人  
後國よ遷福し地力易妙の法と弘敷し終るを修修人急ぎ  
我山の霞雲をかけ万里の海川を越へて城の後州よ下向  
して國府の荻原小糸し聖人よ指しきりる祖聖人高綱の  
出家しうの次母と看給ひそは又河海を浮り終るよ高綱も  
次又深と神小滞るるがう教心の因縁日次の善徳とのべ何ま  
と河教身あえきりて終る聖人高綱が死と感しとるは  
「曰く汝望くも教記心の美と終りて是名徳のありあ

されば一切の心も悟るの界の夏のごとく又幻のごとく猶も小庵下  
為地たみちの九くまま造ぞう悪あく不ふ善ぜんの族やう若やく根こん切き徳とくの種くみままくく候あき初はつの  
功こうも積つままりりも速すみ又また佛ぶつ果くわ又またあるの直ちかるるの縁えん陀だ中ちゆう弘こうの極ごく云いん  
又またあるのはしけせ折せ云いんを海うみくく信しん心しんせせるるものたと人にん三さん世せ諸しよ佛ぶつ  
の海うみ度た又またままととるる又また送おくりの衆しゆ人にん十じゆ方ぽう降くだ刺さの門もん戸こと閉とままし  
候あ穢けの女に人にも直ちか又また安あん喜ぎの降くだ刺さままりりて無む上じやう光くわうと徳とくとと  
りあるる年ねんの疑うたがひひああららびびをを一いつ念ねん救きう起きの降くだ信しん又またつつとと  
稱しやう名な念ねん佛ぶつの心しん業ごうと勅ちやくじじとといいと稱しやうんんごごらら又また南なん教きやう化け又また  
孫そん公こう又またおおひひて高たか綱なう立たたたりり地ち力りき易い妙めうの旨しよ候あと受う得とくしし性しやう  
生しやう安あん又またの了りやう解げとと雲うんめめ煮にに真まの海うみ弟てい子しととあり法ほふ名なを  
釋しやく了りやう智ちと暢ちやうりりるる又またおおひひととままららくく南なん教きやう化けの益えきと善ぜん  
不ふ縁えんああららぶぶ山さんとと信しん州しゆう又また立たたたりり誠まこと栗りし林りんの郷きやう又また一いつとと記き云いん云んん云いん云んん

寺と号け専ら稱名念佛あるのみなりき 栗林のついでに松本  
より一里西南あり 松本  
松本の筑石川玄蕃度善提あるのみなりて天和年中松  
本又後以○什宝高祖南真等十名名号○二い字名号如連  
上人○にる連南真親 高祖聖人法若西佛了智也後漢にも聖人南と南  
南と 寺の同基即仇く本三即盛綱西佛の康樂寺の同基海澄水即率親の息胤土  
死入通廣後妻坊光明とくへん 了智の南寺の同基仇く本三即高綱也又三直會宗  
寺の同基の盛綱とくへん其を孫三即先真とくへん其を孫三即先真とくへん其を孫三即先真とくへん  
盛綱入る法若と書加ゆへん其を孫三即先真とくへん其を孫三即先真とくへん其を孫三即先真とくへん  
て又連南真親 ○系圖の巻物 盛綱の  
○武田信玄公諸般虎濟朱印  
其説又曰仇く本三即高綱親也の物係遠縁のものと勝り既よ  
津和と企んとて一附西佛坊とてこれとて盛綱へ送る一書とて曰く  
跋水の魚食食不知耐渴 善中穢虫争居不知外信  
かんのびとくまをて送るなりなる綱とて者としておそれけ三の意は信一得て  
津和とてまをて盛綱とて其まをりや否やとてまをりや否やとて  
大宝山心妙寺 西流海坊所 日圓日不と云  
用基の仇く本三即高綱入道了智也系圖東流心妙寺と

日系國けいこくなりる網あみ用基もちもとの寺てら二つふたつふかきあかりなりととも何なにも根ね枝えををかかささば

本曾山長稱寺 東流 日圓日不ひつらふ

用基もちもとの義ぎ延えん坊ぼう念ねん信しん 俗姓本曾 即義基 覚かく如にょ蓮れん如にょ乃の西さい上じやう人にん妙みやく化けの靈りやう

場ば也や中ちゆう古こ城じやう後ご國こくより安やす又また移うつ燈とう住ぢゆう住ぢゆうと云いふ云いふ○義ぎ延えん坊ぼう念ねん信しん

高たか祖そ聖せい人にんの真ま弟てい也やと云いふ又また真ま佛ぶつ上じやう人にんの門もん弟てい也やと云いふ

祖そ師しの孫まご弟てい子こなりと云いふ又また何なにも是こゝろなりと云いふ

志しと云いふ

宮川神社八幡宮の社 松中より三里半 中条村より

社しゃ説せつ曰いは祖そ師し聖せい人にんの真ま弟てい誼ぎ訪ほう郡ぐん丹に後ご守しゆ源げん奉ほう政せい

法ほふ名な宮みや川がは津つ喜き坊ぼう姓せい所しよなりと云いふ○什じふ宝ぼう九く字じ十じふ字じの

名な号ごう○三さん方ぱう心しん面めん如にょ来らい○聖せい人にんに十じふ歲さい御ご本ほん像ざう○後ご光くわう六りく

字じ名な号ごう○津つ古こ和わ撰せん○日にち乃の丸まる名な号ごう 右の聖人より附屬し後大教上人 孫如上人亦寓書ありと云

○英えい渡わた酒しゆより信しん徳とく入い入い東とう國こくと云いふ又また本ほん名な者しや樹じゆるとらり先せん英えい渡わたのはら

合あひより馬ま込こと云いふ又また石いし橋はしありと云いふ又また信しん徳とくのはらたらしり馬ま込こと云いふ

と云いふ又また本ほん名な者しやと云いふ又また三さん戸こ井い井いと云いふ又また後ご大たい教きやう上人じやうじんと云いふ

出いると入いるとらり丸まる名な号ごうのはら本ほん名な者しやのはら月げつのはら記きと云いふ

願ねん原げんあけ松しょうのはら小こ今いま井い村むらをはら是こゝろ本ほん名な者しや義ぎ仲ちゆうのはら今いま井い村むら即すなはち通とほ来らいと云いふ

右みぎのはら橋はし道みちははら不ふのはら新しん殿でんと云いふ

生せいと云いふ又また入いると谷やのはら指さしをはら物ものと云いふ又また本ほん名な者しやと云いふ

宮みや腰こしははら義ぎ仲ちゆうのはら志しと云いふ又また本ほん名な者しやと云いふ又また本ほん名な者しやと云いふ

洗せん馬ま坊ぼう洗せん馬ま坊ぼうははら志しと云いふ又また本ほん名な者しやと云いふ又また本ほん名な者しやと云いふ

○上じやう流りゆう坊ぼうははら本ほん名な者しやのはら建けん御ご名な命めいと云いふ又また本ほん名な者しやと云いふ

本ほん名な者しやのはら下か願ねん姫ひめと云いふ又また本ほん名な者しやと云いふ又また本ほん名な者しやと云いふ

本ほん名な者しやのはら建けん御ご名な命めいと云いふ又また本ほん名な者しやと云いふ又また本ほん名な者しやと云いふ

本ほん名な者しやのはら建けん御ご名な命めいと云いふ又また本ほん名な者しやと云いふ又また本ほん名な者しやと云いふ

本ほん名な者しやのはら建けん御ご名な命めいと云いふ又また本ほん名な者しやと云いふ又また本ほん名な者しやと云いふ

本ほん名な者しやのはら建けん御ご名な命めいと云いふ又また本ほん名な者しやと云いふ又また本ほん名な者しやと云いふ

寢の覚の床





諏訪湖

其の津大津又若く則免し終てけ後訪明神是とあり  
○後訪の湖海ひるたる湖うて西に飛弾と此る炭うびと在る後河  
りる不二のる根と遠く星と湖ありの眠る三里とはいへども丸山寺の  
よみく風と系勝又もいふるがうに後訪は去と稱するに雪月湖上  
一面又雪水より清うる人馬皆氷のこと往來し後訪の上下と往還  
るの近きや教里上人の便利とせり霜月の始より湖上氷と後  
其の中津後訪よりいふありけし津後訪に在りて後の人皆畏くむなる  
馬と馳車と畏る後湖よりいふるれどもいふより今もいふるに水破  
人馬湖ありいふるいふる例とせし先は後訪の津津春属の津  
奔していふて後訪と教へたまふ一云傳へたり云二月の末再び津  
氷と後訪をいふ明津の人馬の往來ととも後訪いふとく湖上と後  
若くは後川百首歌傳りあり

後訪の湖の水のこのうい後訪の津乃よりいふて解るなり  
又後訪の湖の中抄ふは信濃の後訪の明津の一宮とて女津の津(師  
之の晦日の夜色ひ後訪に抄ふいとく後訪の湖氷りて諸人歩外  
後訪し後訪の晦日の夜色よりいふるなるの氷のこよふてまゝに  
具は解ぬとていふり又一説は水の上は麻の足然る後訪の津り終  
まはしとて里人といふより後訪の神よりいふる

### 上野國

信州後訪より後吹峠に越へて上野國坂本よありまより後川  
其村をいふ松井田の村ありけし津より東の方十六七丁と赤本山あり  
其村の小倉山智明坊の洞あり

### 小倉山智明坊舊跡

信州松井田より上野松井田より約二十七里余  
松井田より十七丁西の小倉山あり

智明坊の法統と人の御弟子とて智明坊蓋儀乃知識あり

小倉又隠遁とあり十年  
元久二年の  
居住し終へるとあり

高祖聖人滅後又二年乃同御座はし建曆元年勅免

と世なり終へり其後聖年の表上治の思石ありとて小國

と雪海く山陸道の往來難く東海より上治

終りんとく信濃治とてけしけり昔光寺へ向參詣あり

吹峠と誠へ松井田あり終へ小倉山とて人なるに智明坊

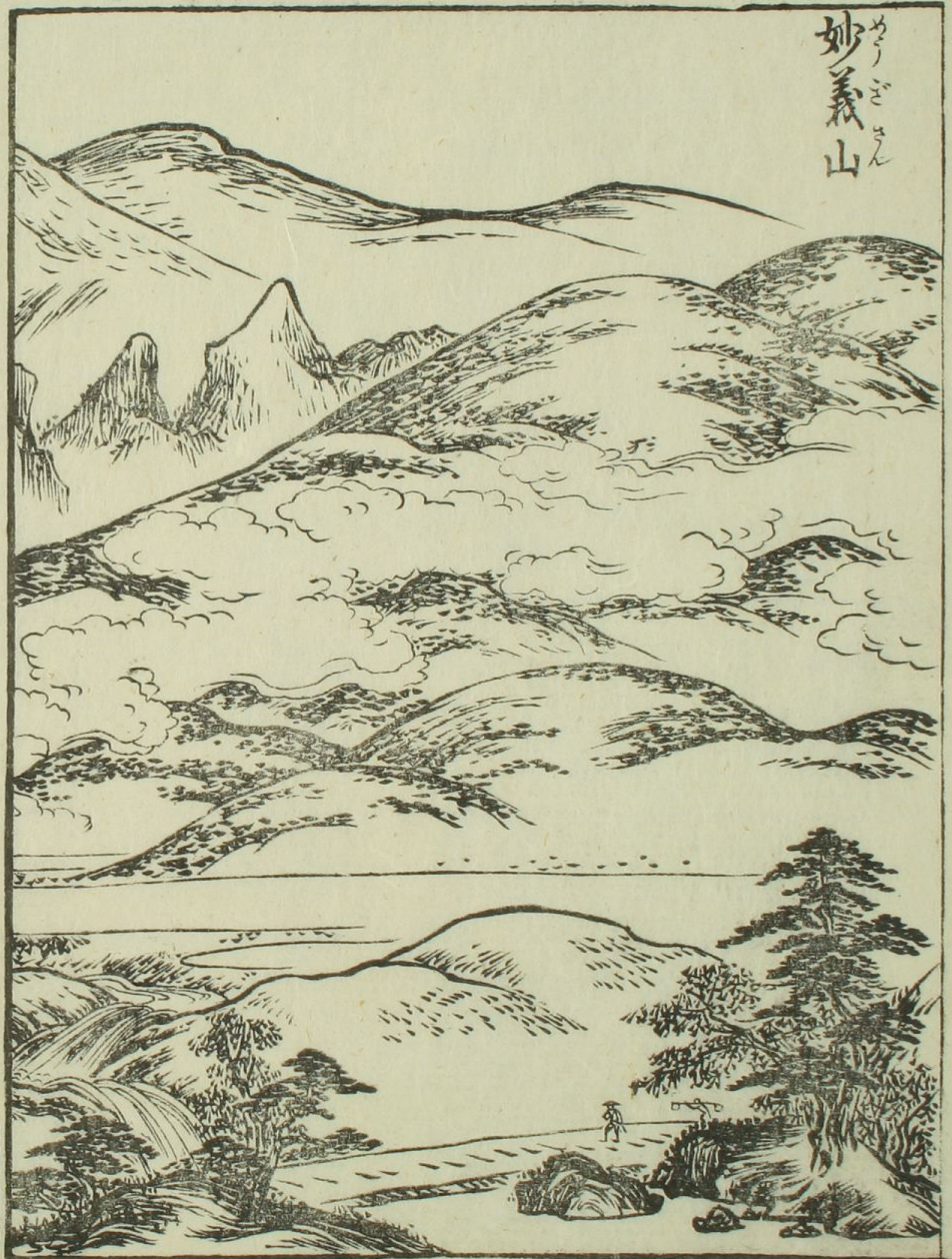
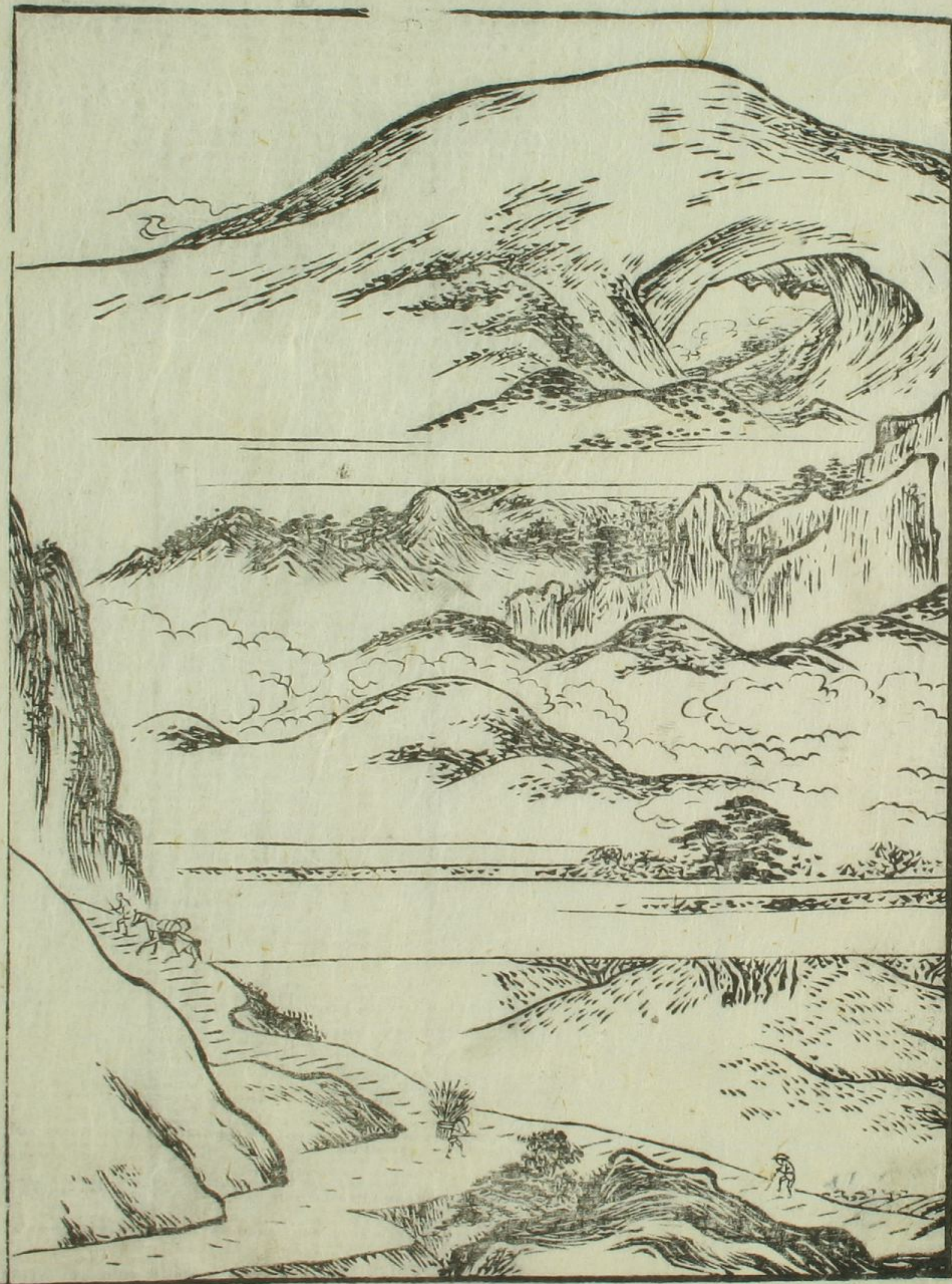
在りたりとてけし百餘あり其より見寄ありて京都のり

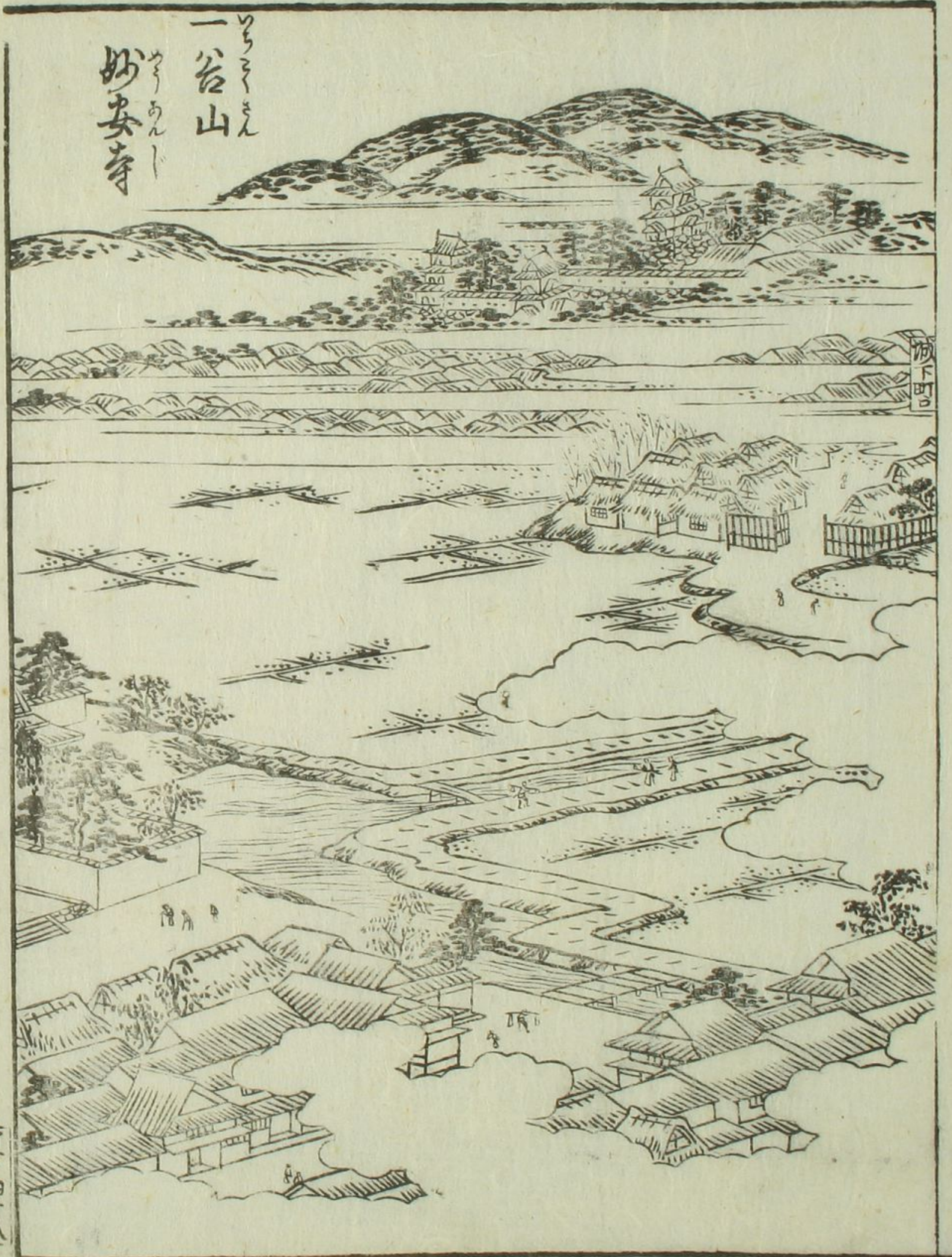
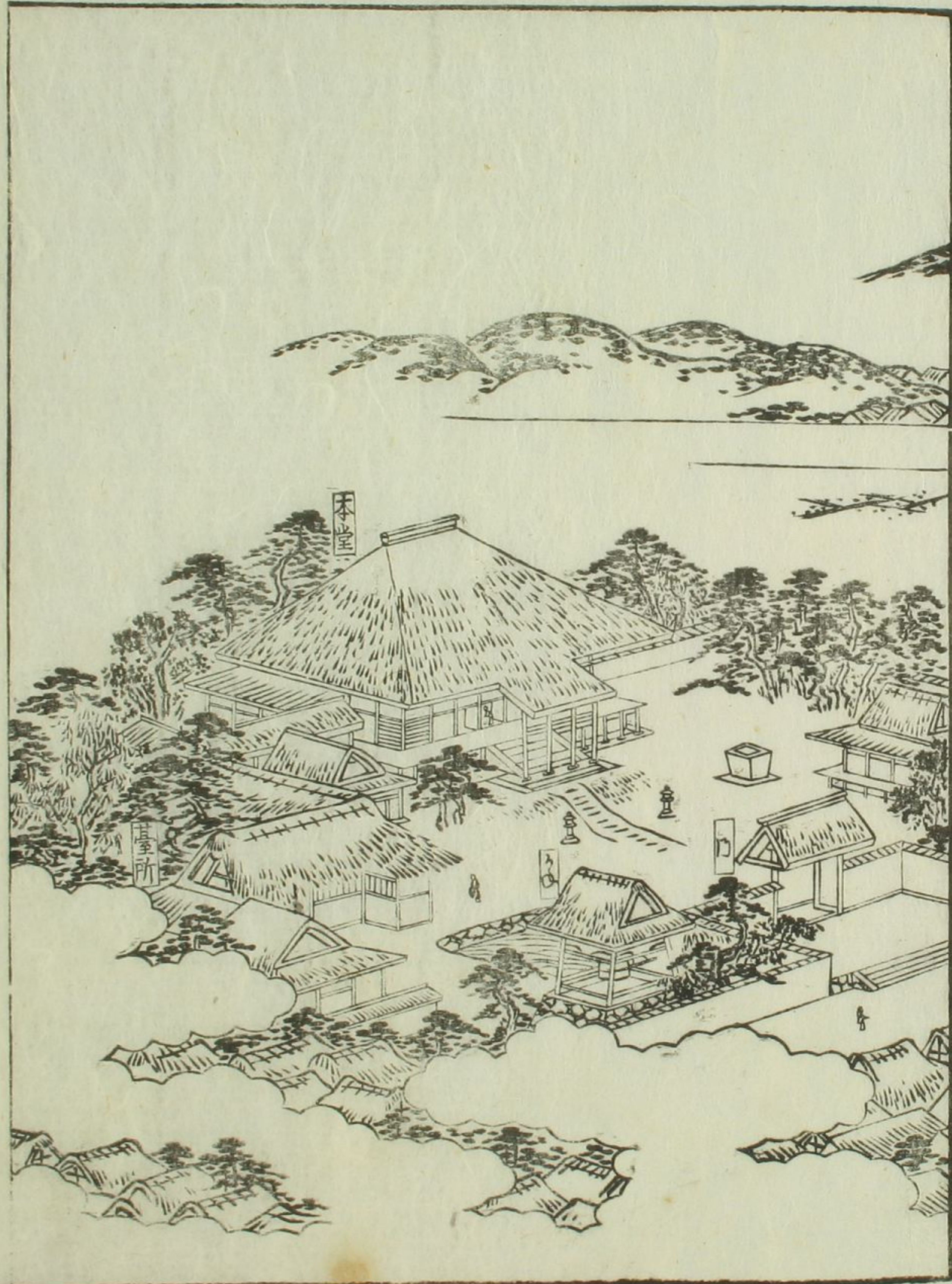
圓あり小法統と人の正月二十日所遷化あり終へ





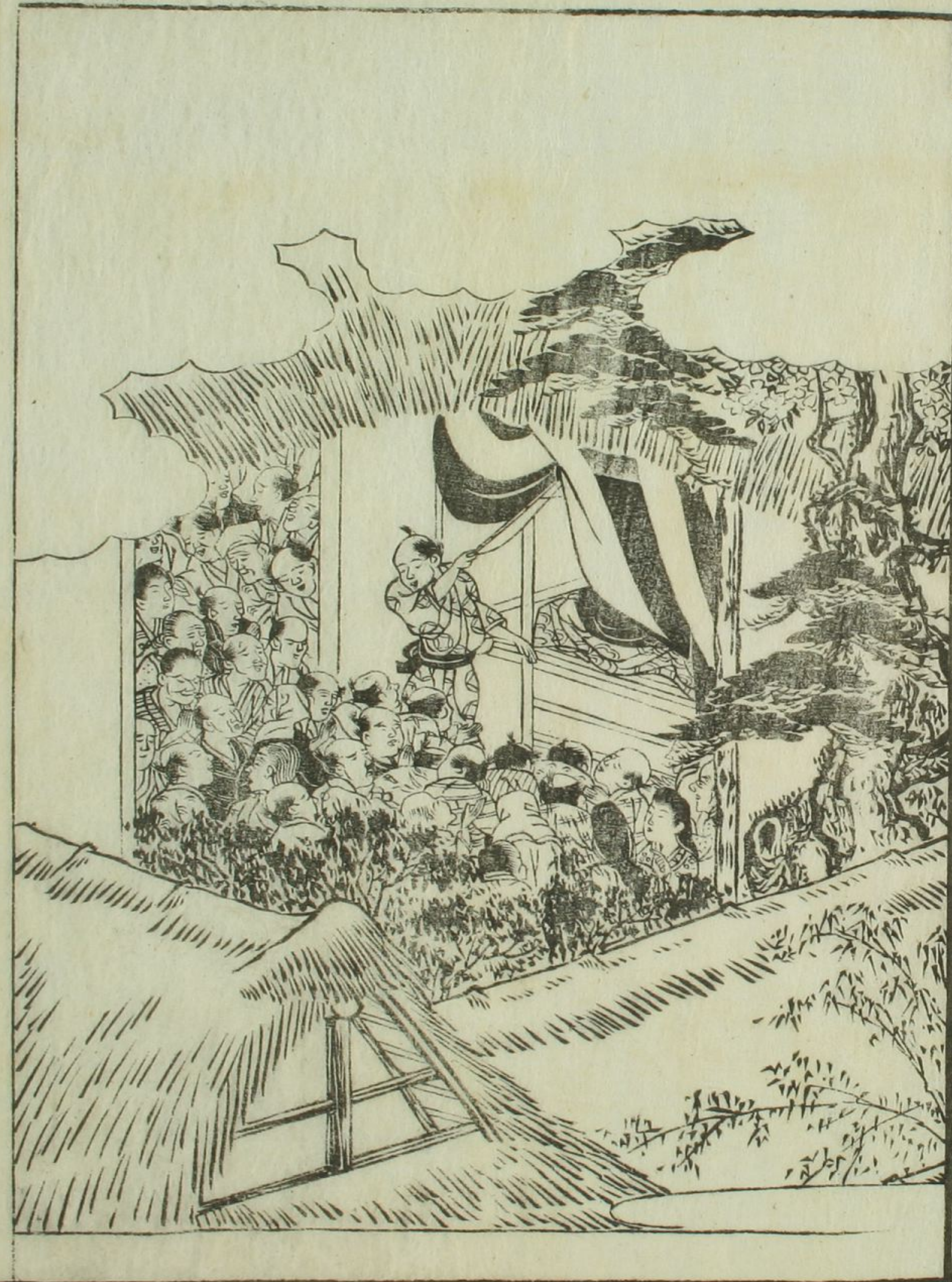






義久三 是より隆身して中教を信じらるる専ら海く又二心も  
つき成徳坊一谷より一寺を造立しうとも聖人の命より  
より日國三村に堂とて移し新号と妙安寺と号せ給ふ  
聖人御降洛の後成徳坊安又住してまゝく御京  
法相續ありしが弘長乃初の以漸御年長とせたま  
ひぬまに於て御去り歸らせ給ふよりやと東國の門系等  
甲合と上洛して今一度聖容とも拜しなると換て儀し  
れども老るる叟老るる叟の及らるる都に毫らん  
るも叶ひかなく即成徳坊に付て歎ひらるる我くいる我  
ひ去の若縁みや聖人の御化益又歎く御門系の教の連  
きりぬれがらぬ聖人御自御真像と御記念よりし儀  
ともしるる生若記後の歎く御成徳坊までの御化益且も衆

世の御對面とも仰せらるるはとく海とるがし歎ひをりま  
は成徳坊殊勝と云ひは御門系惣代として弘長二年上洛  
あり良久しく歎くる聖人え拜教よりとらまはしうが聖人何  
ゆよりも関東の門系まはしく御教化を信じ念佛の  
信心愈りるれを御すまはしうと御成徳坊に給ふ  
平御成徳坊よりと関東の及る俗等御真像を給ひまは  
と言とやそれらるる聖人御慈悲の余り御降洛ありて御  
老律の苦惱とも御厭ひらく自芥刀を中し御真像  
を彫刻し給ひ是等が心根を養ふる形をれが末世に  
とけ形像をそと化益せしむべきものとも成徳又授けあ  
成徳坊教法御法は是と頂戴し御成徳坊より三村  
乃自坊に安座し門系の輩に拜せし給ひは御門系



の道俗競ひ集りて御真觀と拜し歎法廣仰と云々  
御在國の昔も勝もり是より妙安寺にお傳し安んずる  
歎しなむる 上末元よりあり安永八年の元大谷送致福のころより又安永五年  
保の二元ともいへ御真像(聖人)因東より御安んずるの  
成法坊御名所と申すを移入より御降臨の御元念ふべく  
御自他もて成法坊へ御降臨しつて移入御真像と云々 其時國守の御守  
より寺銘を寄附せらるる善提所と云々 移入よりふそのら  
け郡守武州川城を領し彼西にうつり移入が妙安寺と  
と云々 隨後して川城を移入せり 其元三村の四地にお傳し  
寺号と御正寺と改め蓋若のり  
高祖 これとも貞享年中古来の寺号を復し妙安寺と稱し別寺と  
さしうまくれ三村まなりの両妙安寺とも同姓同系の寺なり  
聖人御自他の御真像を川城移入の妙安寺にお安んずる  
ありしよさまぐみ難き子細のりりてけ真像を東本願  
寺に移したてまつり今東の御本廟といはれり御像を  
とらりし是なり其後再び上野厩橋へ寺を引うつらひしと云々

御乃移傳つるふもさぐいなるものなりと云々記と云々  
の記享保の記大谷送致縁縁と云々記と云々の  
靈宝品目 ○高祖聖人等身御觀 蓮如上人の御等身觀如上人より  
免許あり空如と  
人御派伝あり ○泥等十字名号 ○八字九字十字六字名号  
若小 ○皇太子御觀 ○唯信抄 若上聖人  
御真像 ○成法法師自畫像 成法法師と云  
流の聖人御像 右宝物等乃表具表紙文庫管等悉皆せよた  
くひなき重宝なり世と門系乃陸喜地も認事しま  
ことり比類なき寺格なりとぞ

○厩橋の地天正年中織田信長より家臣勝川元近が獲一蓋居處と  
と野と武系との界又川の川と云る川あり勝川一蓋相州小田原の  
地と川條氏政と對戦し不之又下野の界又後世川あり川の  
大田本との名と新田と云り義貞居處の地を新田の今も  
石に馬場の名もあり川の向ふ下野の地は是れと云ふ  
是れも氏出の地といへり武土まぐ地を名とせり是の

佐理の  
船橋



とらへ代は代ははとくをえり

○麻橋より武蔵國江戸へ巡拜せりなり或は下野又飯き日老と  
清で旧流巡拜せりなり下総へ城を國境又佐理の  
船橋の流あり多系集り

又後撰集り  
とらへ代は代ははとくをえり

○佐理の佐理ははとくをえり  
佐理の佐理ははとくをえり  
佐理の佐理ははとくをえり  
佐理の佐理ははとくをえり

○風去泥よ上毛野下毛野との上野下野西國の内よ上野の  
佐理佐理佐理と名つり佐理の中よ川あり流激と名つり佐理の中  
川と名つり其流激と名つり西國の境として川の西よ上毛野と  
つひ川の東を下毛野と名つり

○佐理大明神の社に甘羅郡あり上野國の一の宮あり佐理  
佐理佐理佐理佐理佐理佐理佐理佐理佐理佐理佐理佐理

○宮城山は明神の社あり佐理佐理佐理佐理佐理佐理佐理佐理  
佐理佐理佐理佐理佐理佐理佐理佐理佐理佐理佐理佐理

二十四輩順拜圖會卷三五終

○玉村名和司馬乃わたりとあるは山あり此山中ふうかの沼あり  
 いづかのやいづかの沼のいづつて居しき人と今いふと  
 又山とたいづかの沼ありとあるは山も此よりあり  
 うむ玉の髪髪ら成けとて木の下の房に濡れあはれ  
 ○刀根川又此邊より大川なり勅勅撰  
 並にけの神こそやとめとの川の石の踏しむいさかりより  
 ○赤城明神の社の勢田郡あり本地主満大菩薩元恭天皇の御代は  
 上野ののこのはりののやまふいふと流と出らん

浪華春泉齋竹原清秀畫



跋

書肆某等。齋二十四輩巡拜圖  
 會者而到。傍請其是正也。予乃  
 謝曰。吾固不知文辭。况於瞿曇  
 氏之道乎。且性多病。及未嘗出  
 都門之外。身所圖會之靈地  
 務境。亦未見之也。以其一所不



去與所不見。而憶斷之。猶瞽者  
論文章。聾者辨鐘鼓。吾寧敢  
吾寧敢。固辭再三。某等請而不  
已。乃繕其書而閱之。別行文燁字。  
摸圖優哉。謂之二絕。豈阿其所好  
乎。而綴緝緣起。故度者。河四之  
了。貞師也。姑舍而不論焉。若夫

摸圖其靈地。務墟者。我竹原生  
乎。生往年提挈三友。而遊北越  
東關。見人之所未見。聞人之所未聞。  
而煥發其蘊蘊者。結撰之思。寧  
亦困矣。於是乎。摸圖一切奪化  
工。可以知而耳。縱令彼靈地勝  
境。之邪。而夜哭。亦何怪焉。以

某等懇求之知。而不得。遂以  
 斬之。于卷尾。以塞其責云。于時享  
 和癸亥春三月

法橋玉山藏



僧了貞著竹原春泉齋画

二十四輩巡拜圖會後篇

全部五冊

此篇に載る所は江戸浅草乃御堂築地御坊よりとどめ  
 上野常陸陸奥出羽下野下総相摸甲斐文駿河遠江参  
 河尾張美濃摂津河内大和備後に至るまでの御舊跡  
 を前編と同く真景の繪圖を加へ里數名所等と集め  
 記し若後の篇と合せ視るとれり安坐し多御舊跡と順  
 拜せしむの書なり

彫刀氏

京

大坂

井上治兵衛

樋口源兵衛

市田次郎兵衛

池田長右衛門

享和三年癸亥春新刻

京都書林

菱屋

孫兵衛

江戸書林

松本

平助

大阪書林

小刀屋

六兵衛

海部屋

勘兵衛

勝尾屋

六兵衛

河内屋

太助

京都府立総合資料館蔵



